

はつ恋

ツルゲーネフ

神西清訳

青空文庫

P・V・アンネンコフに捧^{ささ}げる

客はもうとうに散つてしまつた。時計が零時半れいじはんを打つた。部屋の中に残つたのは、主人と、セルゲイ・ニコラーエヴィチと、ヴラジーミル・ペトロヴィチだけである。

主人は呼鈴よびりんを鳴らして、夜食の残りを下げるように命じた。

「じゃ、そう決りましたね」と主人は、一層ふかぶかと肘掛椅子ひしかけいすに身を沈めて、葉巻はまきに火をつけながら言つた。——「めいめい、自分の初恋はつこいの話をするのですよ。では、まずあなたから、セルゲイ・ニコラーエヴィチ」

セルゲイ・ニコラーエヴィチというのは、まるまると肥ふとつた男で、ぽってりした金髪きんぱつ・色白の顔をしていたが、まず主人の顔をちらと眺めると、眼めを天井てんじやうの方へ上げた。

「僕ぼくには初恋というものがありませんでしたよ」と、彼はやがての果てに言つた。——

「いきなり第二の恋から始めたんです」

「それはまた、どうしてね？」

「しごく簡単ですよ。僕は十八の年に初めて、あるとても可愛らしいお嬢さんじやうさんのあとを追ひ回しました。ところが、その追いまわし方というのが、こんなこと僕にはさっぱり新めづしくも珍めづしくもない、といった風だったのですよ。ちょうど、あとになつていろんな女を口く

説いた時と、まるつきり同じだったわけです。実を言うと、僕が最初にして最後の恋をしたのは、六つの頃で、相手は自分の乳母ばあやでしたが、——なにぶんこれは大昔おおむかしのことです。二人の間にあったことの細かい点こまは、僕の記憶きおくから消えうせていますし、またよしんば覚えていたところこゝろで、そんなことを、誰だれが面白おもしろがるでしょう？」

「すると、どうしたもんですかな？」と、主人が言い出した。——「わたしの初恋にいたところで、大して面白いことはないのですからね。わたしは、現在の妻、アンナ・イヴァーノヴナと知合いになるまで、誰ひとり恋した覚えはないんですし——しかも我々のことは、万事すらすらと運んだのです。それぞれ父親から縁談えんだんをもち出されると、我々は見えるお互たがいどうし好きになつて、一足とびに結婚けっこんしてしまったというわけ。わたしの話は、ほんの二言ふたことで済んでしまいますよ。いや皆さんみな、白状しますとね、わたしが初恋の問題をもち出したのは——むしろあなた方がたに期待していたのですよ、お二人とも、老人とは言えないけれど、さりとてお若いとも言えない独身者ですからな。どうです、あなたは何か面白い話をして下さるでしょうな、ヴラジミール・ペトローヴィチ？」

「わたしの初恋は、全くのところ、あまり世間なみの部類には入らないものなんです」と、やや言いよどみながらヴラジミール・ペトローヴィチは答えた。これは四十がらみの、

黒髪に白を交えた男である。

「やあ！」と、主人もセルゲイ・ニコラーエヴィチも異口同音に。——「なおさら結構：

…話して下さい」

「お安い御用です……が、困りましたな。話すのはやめにしましょう。わたしは話が不得手なほうですから、無味乾燥なあつけない話になるか、それともだらしない調子はずれな話になるか、そのどっちかです。もし宜しかったら、思い浮ぶだけのことをすっかり手帳に書いて、読んでお聞かせしようじやありませんか」

友人たちは初め承知しなかったが、結局ヴラジーミル・ペトローヴィチは自説を押し通した。二週間ののち、彼らが再び寄り合った時、ウラジーミル・ペトローヴィチは、その約束を果たした。

彼の手帳には、次のようなことが書いてあった。——

一

その頃わたしは十六歳だった。一八三三年の夏のことである。

わたしはモスクワの、両親のもとに住んでいた。彼らの借り入れた別荘が、カルーガ
関門のほとり、ネスクーチヌイ公園の前にあったのである。——わたしは大学の入学準備
をしていたが、勉強といつてもろくにせず、ゆつくり構えていた。

誰一人わたしの自由を束縛するものはなかった。わたしはしたい放題に振舞っていた。
だれひとり

たが、とりわけ最後の家庭教師と別れてからはなおさらだった。その教師はフランス人で、
自分がまるで「爆弾みたいに」（コム・ユヌ・ボンブ）ロシアへ落下したという考えに、
いても立つてもいられず、物凄い表情を顔に浮べながら、幾日も幾日もぶつとおしに、
ベッドの中でごろごろしていたものである。父のわたしに対する態度は、いわば冷淡な
優しさにすぎなかったし、母は母で、わたしのほかに子供がないにもかかわらず、ほとん
どわたしを構ってくれなかった。ほかの心配事で母は手いっぱいだったのである。わたし
の父はまだ若くて、すこぶる美男子だったが、財産を目当てに母と結婚した。母の方が十
年も年うえだった。わたしの母親は、気の毒な生活をしていた。しょっちゅう興奮したり、
焼餅をやいたり、ぷりぷりしたりしていたのだが——ただし父の面前でやったわけでは
ない。母はひどく父をこわがっていたし、父は父で、きびしい、冷たい、よそよそしい態
度を崩さなかった。……わたしは、あれほど乙に氣どり澄ました、うぬぼれの強い、独り

よがりの男を、いまだかつて見たことがない。

その別荘で過した最初の二、三週間のことを、わたしは決して忘れないだろう。すばらしい天気が続いていた。我々が市内から引つ越したのは五月九日で、ちょうど聖ニコライの日であった。わたしの散歩は——ときには別荘の庭、ときにはネスクーチヌイ公園、またあるときは関門の外まで足を伸ばすといった風で、いつも何か本を一冊——たとえばカイドノーフの万国史通など——を持って出るのだったが、それをめくってみることはめつたになく、とてもたくさん空で覚えていた詩を、高らかに朗読する方が多かった。血潮は体内でたぎりたち、胸はうずき——いや思い出しても、むずむずするほど甘たるく、滑稽なほどだ。わたしは絶えず何ものかを心待ちにし、絶えず何ものかにびくびくし、見るもの聞くものに心を躍らし、全身これ待機の姿勢にあった。空想が生き生きと目ざめて、いつもいつも同じ幻のまわりを素早く駆けめぐる有様は、朝焼けの空に燕の群れが、鐘楼をめぐって飛ぶ姿に似ていた。わたしは物思いに沈んだり、ふさぎ込んだり、ときには涙さえ流した。しかし、こうして響き高い詩句や、あるいは夕暮れの美しい眺めによつて、あるいは涙が、あるいは哀愁がそそられるにしても、その涙や哀愁のすきから、さながら春の小草のように、若々しい湧きあがる生の悦ばしい感情が、にじみ出すの

であつた。

わたしには一頭の乗馬があつた。わたしはそれに自分で鞍くらを置いて、ただ一人どこか遠乗りに出かけたものだつた。馬をギャロップで走らせて、さも自分をトーナメントに出場した中世の騎士きしのように想像したり——ああ、わたしの耳に吹きつける風のなんと朗ほがらかだつたことよ！——あるいは顔を大空へ振向けて、その輝こうかしい光ひかり明めいと紺碧こんぺきの色を、あけひろげた魂たましいの底まで深く吸い込んだりした。

いま思い返してみると、女の姿とか、女の愛の面影おもかげとかいうものは、ほとんど一度もはつきりとした形をとつて心に浮んだことはなかった。しかも、わたしの考えることのすべて、わたしの感じることのすべてには、何かしら新しいもの、言うに言われぬ甘美かんびなもの、いわば女性的なもの……に対する、半ば無意識な、はじらいがちの予感が、潜ひそんでいたのだつた。

この予感、この期待は、わたしの骨の髄すいまでしみわたつて、わたしはそれを呼吸し、またそれは血の一滴いつてき一滴いつてきに宿つて、わたしの血管を走りめぐるのだつたが……実は間もなく実現される運命にあつたのである。

我々の別荘は、円柱の並んだ木造の地主屋敷じぬしやしきと、さらに二棟ふたむねの平べったい傍屋はなれから成

つていた。左手の傍屋は、安ものの壁紙かべがみを作る小っぱけな工場になっている。……わたしは二、三遍さんべんそこをのぞきに行つたが、油じみた上っ張りうわばを着て、頬ほおのこけた顔をした、もじやもじや髪かみの瘦やせた男の子が十人ほど、四角な印刷いんさつだいぎ台木を締めつける木の梃子てこへ、しよつちゆうとびついて、そんな風に自分たちの虚弱ひよわい体の重みでもって、壁紙のまだらな色模様を捺おし出しているのだつた。右がわの傍屋は空あいていて、貸家になっていた。ある日——五月九日から三週間ほどたつた日のこと——この傍屋の窓においていた鎧戸よろいどがあいて、女の顔がちらほらしたのは——どこかの家族が越して来たものと見えた。忘れもしない、その日の夕食のとき、母は侍僕頭じぼくがしらに向つて、隣へ引つ越して来たのは誰かと尋ねたが、公爵夫人こうしゃくふじんザセーキナという苗字みょうじを耳にすると、まんざら敬意のないでもない調子で、まず「まあ！ 公爵夫人……」と言つたが、やがてこう付け足した、——「きつとどこかの貧乏貴族びんぼうきぞくだろうよ」

「三台の辻馬車つじばしやで越していらつしやいました」と、うやうやしく皿さらを差出しながら、侍僕頭がしたり顔に、——「自家用の車はお持ちでありませんし、家具もごくお粗末そまつで」

「そう」と、母は答えた。——「でもまあ、ましですよ」

父が冷やかな一瞥いちべつを母にくれたので、母は黙だまつてしまった。

全くザセーキナ公爵夫人は、裕福な婦人でありようはずがなかった。彼女の借りた傍屋は、いかにも古びて手狭で、おまけに天井の低い家なので、いくらか小金を持つた連中なら、とても住む気にはならないからである。——とはいえ、わたしはその時、そんなことは気にもとめずに聞き流した。公爵などという肩書は、ほとんどなんの作用もわたしに及ばさなかった。わたしは少し前に、シルレルの『群盗』を読んだところだったのである。

二

わたしは毎日、夕方になると、鉄砲を持ってうちの庭をぶらついて、鴉の番人をするのが習慣だった。——この油断のない、貪欲で悪賢い鳥に対して、わたしはずっと前から憎悪をいだいていたのである。さて今しがた話に出た日も、わたしはやはり庭へ出て行つて——並木道という並木道をむなく歩き回ったあげく（鴉はわたしをちゃんと知っていて、ただ遠くの方できれぎれに鳴くばかりだった）、ふと低い垣根に近づいた。それは、右手の傍屋の向うへ延びて、その家に属している細い帯のような庭と、うちの領

分との境を成しているのだった。わたしは、うなだれて歩いていた。すると不意に、がやがやと人声がした。わたしはひよいと垣根ごしに眺めて——化石したようになってしまった。……奇妙な光景がわたしの眼に映ったのである。

わたしからほんの五、六歩離れた所——青々したエゾ苺の茂みに囲まれた空地に、すらりと背の高い少女が、縞の入ったバラ色の服を着て、白いプラトックを頭にかぶって立っていた。そのまわりには四人の青年がぎつしり寄り合って、そして少女は順ぐりに青年たちのおでこを、小さな灰色の花の束で叩いているのだった。その花の名をわたしは知らないけれど子供たちには馴染の深い花である。それは小さな袋の形をした花で、それで何か堅いものを叩くと、ぽんぽんはじけ返るのであった。青年たちはさも嬉しそうに、てんでにおでこを差出す。一方少女の身振りには（わたしは横合いから見ているのだが）、実にもなんとも言えず魅惑的な、高飛車な、愛撫するような、あざ笑うような、しかも可愛らしい様子があつたので、わたしは驚きと嬉しさのあまり、あやうく声を立てんばかりになつて、自分もあの天女のような指で、おでこをはじめてもらえさえしたら、その場で世界じゅうのものを投げ出してもかまわないと、そんな気がした。鉄砲は草の上へすべり落ち、わたしは何もかも忘れて、そのすりとした体つきや、ほっそりした頸の根や、奇

麗^{れい}な両手や、白いプラトックの下からのぞいているやや乱れた淡色^{あわいろ}の金髪^{きんぱつ}や、その半ば眠^{ねむ}った利口^{ねむ}そうな眼^めもとや、その睫毛^{まつげ}や、その下にある艶^{つや}やかな頬^ほなどを、むさぼるように見つめていた。……

「君、おい君つたら」と、不意にわたしのそばで、誰^{だれ}かの声がした。——「よそのお嬢^{じょう}さんを、そんな風に見つめてもいいものかい？」

わたしは、ぎよつと顫^{ふる}えあがつて、茫然^{ぼうぜん}としてしまった。……すぐそばの、垣根の向うに、黒い髪^{かみ}を短く刈^かりこんだ見知らぬ男が立っていて、皮肉な眼つきでわたしをじろじろ見ていた。ちようどその瞬^{しゅん}間^{かん}、少女もわたしを振り向^{ふりむ}いた。……わたしが、くりくりとよく動く活気づいたその顔に、大きな灰色の眼を見てとったのも束^{つか}の間^ま——その顔全体が、いきなりぶるぶる顫^{ふる}えて、笑い出して、白い歯なみがきらめいて、眉毛^{まゆげ}がさも面白^{おもしろ}そうに釣りあがつた。……わたしはさつと赤面すると、地べたの鉄砲を引つつかんで、よく徹^{とお}る、しかし意地の悪くない高笑いに追われながら、一目散^{いちもくさん}に自分の部屋へ逃^にげ込んで、ベッドにころがり込むと、両手で顔を隠^{かく}した。心臓は今にも割れそうに踊^{おど}っていた。わたしはひどく恥^はずかしく、またひどく愉快^{ゆかい}だった。わたしはまだ身に覚えのないほどの興奮を感じた。

ひと休みすると、わたしは髪を撫でつけ、服を払って、お茶を飲みを下りて行つた。うら若い娘の面影は、眼の前にちらついて、動悸はもう落着いていたけれど、胸が何か快く締めつけられる思いだった。

「どうかしたのか？」と、不意に父が訊いた。——「鴉を仕留めたのかい？」

わたしはすっかり父に話してしまおうかと思つたけれど、じつところえて、にやりとひとり笑いをしただけだった。寝支度をしながらわたしは、どういふつもりだか知らないが、三遍ほど片足でくるくる回つて、髪にポマードを塗りたくつて横になるなり、まるで死人のように、ぐっすり朝まで眠つた。夜明け方にちよつと目をさまして、頭をもたげ、感きわまつてあたりをぐるぐる見回したが——それなりまた寝入ってしまった。

三

『なんとかして、あの人たちと知合いになりたいものだが？』というのが、あくる朝わたしが目をさますが早い、まず頭に浮んだ考えだった。わたしはお茶の前に庭へ出てみたが、例の垣根へはあまり近寄らず、誰の姿も見かけなかった。お茶が済むと、わたしは二、

三遍、別荘の前の通りを行ったり来たりして——遠目に窓をのぞいてみた。……カーテンの陰に、あの人の顔が見えたような気がしたので、わたしはあわてて、さっさと前を行き過ぎた。『だが、どうしても知合いにならなくちゃ』と、わたしは、ネスクーチヌイ公園の前に拡がっている砂原を、めちやめちやに歩き回りながら考えた。『しかし、どうしたらいいかな？　そこが問題だ』わたしは、昨日ひよいと出会った時のことを、ごく細かな点まで一々思い浮べてみた。どうしたわけだか、とりわけはつきり思い浮ぶのは、彼女がわたしに浴びせたあの笑い声だった。……とはいえ、わたしがしきりに気をもんで、いろんな計画を立てているうちに、運命はちゃんとお膳立てをしてくれたのである。

わたしのいない間に、母は新しい隣人から、灰色の紙にしたためた手紙を受取っていた。しかもそれを封じた黒茶色の封蝋ときたら、郵便局の通知状か安葡萄酒の栓にしか使わないような代物だった。その手紙は、いかにも無学らしい文章に加えるに汚らしい筆跡をもつて書いてあつて、要するに公爵夫人がわたしの母に庇護してもらいたい旨を願ひ出たものだつた。つまり、公爵夫人の言葉によると、わたしの母は二、三の重要な人物と相識の間柄であるが、今や夫人はすこぶる重大な訴訟を起して、彼女自身の運命もまたその子女の運命も、かかつてそれら人物の手中にあるというのであ

る。『率事^{そつ}ながらわたしこと』と、書いてあった、——『叔女として同じ叔女たるあなた様にお手紙まいらせ候^{そうろう}。この期会にめぐまされ候こと、まことに嬉ばしき限りにて』しかじかといった調子で、終りに彼女は母にむかつて、訪問をお許し願いたいと申出ていた。わたしが外から帰ってみると、母は御機嫌^{ごきげん}斜め^{なな}のていだった。父が不在なので、誰と相談しようにも相手がなかったのだ。いやしくも『叔女』であり、おまけに公爵夫人ともある人に、返事をしないわけにはゆかず、ではどう返事をするかという段になると——母は途方^{とほう}に暮れざるを得なかった。返事をフランス語で書くのは、場はずれのような気がするし、さりとてロシア語の綴^{つづ}りにかけては母は不得手^{ふえて}だったし——自分でもそれを知っていたので、みすみす恥^{はじ}をさらしたくなかったのである。

母はわたしが帰って来たのを喜んで、顔を見るなり、これから公爵夫人のところへ行つて、口頭^{こうとう}をもつて、わたしの母は力の及^{およ}ぶ限りいつ何時^{なんとき}でも奥様^{おくさま}のお役に立ちたいと存じている旨^{むね}を述べ、十二時過ぎに御光来^{ごこうらい}をお待ちすると伝えるように言いつけた。自分のひそかな念願が、思いもかけず早速^{さつそく}かなうことになったので、わたしは嬉^{うれ}しくもあれば空恐^{そらおそ}ろしくもあった。とはいえわたしは、自分をとらえている当惑^{とうわく}を表にあらわさず——まず自分の部屋へ引取つて、新しいネクタイと小さなフロックコートを着ける

ことにした。家にいる時は、まだわたしは短い上着を着て、折り襟おえりのカラーをしていたのだが、実はそれが厭いやでならなかったのである。

四

はなれ
傍屋はなれの、狭せまくるしい薄うすぎたない控ひかえ室しつへ、わたしが押おえても止らぬ武者ぶるいに総身を震ふるわせながら入って行くと、そこでわたしを迎むかえたのは、白髪しろがあたまの老僕ろうぼくだった。銅あかがねいろ
色いろのすすけた顔かほに、豚ぶたのような無愛想な小さい眼めをしておまけに額かたからこめかみへかけてたた畳たたまれている皺しわの深いことといったら、わたしが生れてこの方かた見たこともないほどだった。彼は食い荒にんされた鰯にしんの背骨ひとを一つ皿さらに載のせていたが、奥おくの間まへ通ずるドアを後ろ足で閉とめながら、突拍子とつぴようしもない声でいきなり、

「なんの御用で？」と言った。

「ザセーキナ公こう爵しゃく夫人ふじんはおいででしょうか？」と、わたしはきいた。

「ヴォニファーチー！」と、ドアの向うから、がらがらした女の声と呼んだ。

老僕が無言でわたしに背を向けた途端とたんに、お仕着しきせのひどくすり切れた背中が丸見えに

なつて、そこに赤さびの出た定紋入りのボタンが、ぽつんと一つ残っているのが目についたが、彼はそのまま皿を床へ置くと、奥へ引つ込んでしまった。

「警察へ行つて来たかい？」と、同じ女の声がまたした。老僕が何やらぼそぼそ言うのと、――「ええ？……誰か来たつて？」と、訊き返して、「となりの坊ちゃんかい？　じゃ、お通しおし」

「どうぞ客間へお通りなすつて」と、老僕はまたわたしの前に現われて、皿を床から持ち上げながら言つた。わたしは身仕舞を正して、『客間』なるものへ入つて行つた。

いざ入つてみるとそこは、あまり小奇麗とも言えぬ手狭な一間で、貧乏くさい家具の並べ方も、まるで急場しのぎにやつてのけたといった様子だった。窓ぎわの、片肘の折れた肘掛椅子に坐つてゐるのは、年の頃五十ほどの、髪をむき出しにした器量のわるい婦人で、着古した緑色の服を着て、まだら色の毛糸の襟巻を首に巻いていた。彼女の小さな黒い眼は、いきなり吸い着くように私の顔にそそがれた。

わたしはそばへ歩み寄つて、一礼した。

「失礼ですが、ザセーキナ公爵夫人でいらつしやいますか？」

「ええ、わたしがザセーキナ公爵夫人です。あなたはVさんの御子息でいらつしやるの？」

「そのとおりです。わたしは母の使いで参りました」

「さあ、お掛けなさいな。ヴォニファーチイ！ わたしの鍵はどこ、お前見なかったかい？」

わたしはザセーキナ夫人に、その手紙に対する母の返事を伝えた。彼女はそれを聞きながら、太い赤い指で窓がまちを軽く叩いていたが、わたしが口上を終ると、もう一遍わたしをじつと見つめた。

「大層結構です、ぜひ伺いましょう」と、やがて彼女は言った。——「でも、あなたはただほんとにお若いのね！ お幾つですの、失礼ですけれど？」

「十六です」とわたしは、思わず口ごもりながら答えた。

公爵夫人はポケットを探って、何やらいつぱい書き込んだ油じみた着付を取出すと、つい鼻先まで持っていった、その検分にかかった。

「結構な年頃なこと」と、彼女は、椅子の上で身をねじ曲げたり、もぞもぞしたりしながら、不意に言い出した。——「どうぞあなた、お気楽になさいましな。宅では万事無造作ですから」

『どうも無造作すぎるな』とわたしは、思わず湧き上がる嫌悪の情をもって彼女のぶざま

な様子をじろじろ眺めながら、心の中で考えた。

と、その瞬間、客間のもう一つのドアがいきなりぱつと開いて、敷居の上に姿を現わしたのは、昨日庭で見かけたあの娘だった。彼女は片手を上げたが、その顔にはちらりと薄笑いが浮んだ。

「これがうちの娘です」と、公爵夫人は、肘で娘をさして言った。――「ジーノチカ、お隣さんの御子息だよ。お名前はなんておっしゃるの、失礼ですが？」

「ヴラジーミルです」と、わたしは立ち上がって、興奮のあまり舌をもつらせながら答えた。

「で御父称は？」

「ペトローヴィチです」

「まあ！ わたしの知合いに警察署長をしている方がありましたが、その人もやつぱりヴラジーミル・ペトローヴィチでしたっけ。ヴォニファーチー！ 鍵は捜さなくってもいいよ。ちゃんとわたしのポケットにあったから」

少女は心もち眼を細めて、首をやや傾げたまま、相変らずにやにやししながら、わたしを見つめていた。

「あたしもう、ムツシユー・ヴォルデマールにはお目にかかったわ」と、彼女は口をきつた。（その銀の鈴を振るような声の響きは、何かこう甘美な冷たい感じをなして、わたしの背筋を走った）——「ねえ、あなたをそう呼んでもいいでしょう？」

「ええ、そりやもう」と、わたしは、ますます舌をもつらせた。

「そりや、どこでなの？」と、公爵夫人が訊いた。

公爵令嬢は、母の問いには答えずに、

「あなた今、お忙しくつて？」と、彼女は、わたしから眼を放さずに言った。

「いいえ、ちつとも」

「じゃ、毛糸をほどくお手伝いをして下さらないこと？ こっちへいらっしやいな、あたしの部屋へ」

彼女はわたしに、こつくりうなずいて見せると、さっさと客間を出て行った。わたしはあとに従った。

我々の入った部屋は、家具も幾分はましで、その並べ方も、前の部屋より趣味があつた。もつともその瞬間、わたしはほとんど何ひとつ目に留める余裕がなかつた。わたしは、まるで夢の中にでもいるように身を運びながら、何やら馬鹿々々しいほど緊張した幸

福感を、骨の髄^{すい}まで感じるのだった。

公爵令嬢は腰^{こし}を下ろして、紅^{あか}い毛糸の束^{たば}を箱^{はこ}から出すと、向いの椅子をわたしにさして
 みせて、一生けんめい結び目を解きほぐしてから、それをわたしの両手に掛けた。そこま
 でする間じゆう、彼女はいっさい無言のまま、何かさも面白^{おもしろ}くてたまらないといった風
 の緩慢^{かんまん}な身振りで、相変らずの明るい狡^{ずる}そうな薄笑いを、やや少しひらいた唇^{くちびる}に浮べて
 いた。彼女は毛糸を、折り曲げたカルタ札^{ふだ}に巻きはじめたが、そのうち不意に、ぱつと素^す
 早く私の顔を、なんとも言えない晴れやかな眼差^{まなざ}しで射たので、わたしは思わず顔を伏^ふせ
 てしまった。彼女の眼は、たいていは軽く細目になっているのだったが、それが時たま
 つばいに見開かれると――顔つきがすっかり変つてしまつて、まるでその面輪^{おもわ}に光がみな
 ぎりあふれるように見えた。

「ねえ、昨日あたしのしたこと、どうお思ひになつて、ムツシュー・ヴォルデマール？」
 と、しばらくしてから彼女が訊いた。――「きつとあなたは、けしからん女だと思ひに
 なつたでしょうね？」

「いいえ、僕^{ぼく}……お嬢さん……僕は何にもその……とんでもない……」わたしの答えは、
 しどろもどろだった。

「ね、いいこと」と、彼女は切つて返した。——「あなたはまだ、あたしという女を御存じないけれど、あたし、とつても妙な女みょうななのよ。あたしはね、いつも本当のことだけ言つてもらいたい。さつき伺うと、あなたは十六だそうですけれど、あたしは二十一なんですものね。あたしの方が年上でしよう、だからあなたは、あたしにいつも本当のことばかり言わなけりやいけないのよ……そして、あたしの言うことをきかなくてはね」と、彼女は言い足して、——「さ、あたしの顔をまつすぐ見てちようだい。なぜ見ないの？」

わたしはますます、あがつてしまつたが、とにかく眼を上げて、彼女の顔を見た。彼女はにっと笑つたが、それはさつきのとは違つて、好意のある微笑びしょうだった。

「あたしの顔を見てちようだい」と、彼女は、優しく声を落しながら言つた。——「そうされても、あたし厭いやじやないの。……あたし、あなたの顔が気に入つたわ。あなたとは、仲好なかよしになれそうな気がするのよ。でもあたしは、あなたのお気に召めしまして？」と、抜ぬけ目なく彼女は言い足した。

「お嬢さん……」と、わたしは言いかけた。……

「まず第一、あたしをジナイーダさんと呼んでちようだい。それから第二に——子供のくせに——（と言つて、彼女は言い直した）——青年のくせに——感じたとおりをまつすぐ

に言わないなんて、いけないことだわ。それは大人のすることよ。どう、あたしあなたのお気に召して？」

彼女がわたしを相手に、こんなに打解けて話してくれることは、わたしにとって実に嬉しいことだったけれど、とは言えわたしも、少し腹が立った。わたしは、そうそう子供と見てもらいますまいという意気込みで、できるだけ磊落な、しかも鹿爪らしい顔つきになつて、こう言つてやつた。——「もちろん、とても気に入りましたよ、ジナイーダさん、僕は、それを隠そうとは思いません」

彼女は、ゆっくり句切りながら頭を振つて、——「あなたは家庭教師がついているの？」と、だし抜けに尋ねた。

「いいえ、僕にはもうとつくに家庭教師なんかいません」

それは嘘だった。例のフランス人と生き別れをしてから、まだ一月にもならないのである。

「へえ！ それでわかつたわ——あなた、もうすっかり大人ねえ」

彼女は軽くわたしの指をはじいて、——「手をまつすぐにしてらっしゃい！」——そう言つて彼女は、せつせと糸球を巻きだした。

しばらく彼女が眼を上げないのに乗じて、わたしは彼女をつくづく眺め始めたが、それも初めは盗み見だったものが、やがてだんだん大胆になっていった。彼女の顔は、昨日より一層魅力が増して見えた。目鼻だちが何から何まで、実にほっそりと磨かれて、じつに聡明で実に可愛らしかった。彼女は、白い巻揚げカーテンを下ろした窓に、背を向けて坐っていた。日ざしは、そのカーテンを通して射し入って、柔らかな光を、彼女のふさふさした金色の髪や、その清らかな首筋や、流れ下る肩の曲線や、優しい安らかな胸のあたりに、ふりそそいでいた。——わたしはじつと彼女を眺めているうちに、彼女がなんとも言えず大切に、親愛なものに思えてきたのだ！わたしは、もうずっと前から彼女を知っていて、彼女と知合いになるまでは、何ひとつ知りもせず、生きた甲斐もなかったような気がした。……彼女はもうだいぶ着古した地味な色合いの服を着て、エプロンを掛けていた。わたしは、その服やエプロンの襷を一つ一つ、いそいそと撫でたいような気持ちがあった。彼女の靴の先が、その服の下からのぞいている。わたしはできることなら、うやうやしくその靴にぬかずきたいとさえ思った。『とうとう俺は、こうして彼女の前に坐っているんだ』と、わたしは思った——『俺は彼女と知合いになったのだ……なんという幸福だろう、ああ！』わたしはすんでのことで、喜び勇んで椅子からとび下りそうになったが、

おいしいおやつにありついた赤ん坊^{あかぼう}みたいに、足をちよいとばたつかせるだけで我慢^{がまん}した。わたしは、水の中の魚のようにいい気持で、一生この部屋から出て行きたくない、この場から動きたくないと思った。

彼女の目蓋^{まぶた}がそつと上がって、またもやその明るい眼がわたしの前に優しく輝^{かがや}き出したかと思うと、またしても彼女はにとあざけるように笑った。

「なんであたしを見つめてらっしゃるの」と、彼女はゆっくり言って、指を立ててわたしをおどかした。

わたしは赤くなつた。……『この人はなんでもわかるんだ、なんでも見えるんだ』という考えがわたしの頭をかすめた。『全く、どうしてこの人に、何もかもわからないはずがあらう、何もかも見えないはずがあらう!』

不意に隣の部屋で、何か物にぶつかる音がして——サーベルが鳴り出した。

「ジーナや」と、客間で公爵夫人が呼んだ。——「ペロヴゾーロフさんが、お前に猫^{ねこ}の子を持つてきて下すつたよ」

「猫の子!」と、ジナイーダは叫^{さけ}ぶと、ぱつと椅子から立ち上がって、毛糸^{まり}の毬^{まり}をわたしの膝^{ひざ}へほうり出したまま、部屋から駆け^かけ出して行つた。

わたしも立ち上がって、毛糸の束と毬とを窓がまちに載せると、そこを出て客間へ入ったが、途端に呆氣にとられて棒立ちになった。部屋我真ん中には縞の入った小猫が、可愛い足をひろげて仰向きになっていた。ジナイーダはその前に膝をついて、そつと猫の顔を持ちあげていた。公爵夫人の横には、窓と窓の間の壁をほとんど全部ふさいで、薄色の髪の毛を渦まかせた立派な青年の立つているのが、逆光線の中に、だんだんはつきり見えてきた。軽騎兵の士官で、血色のいい紅い顔をして、眼が飛び出している。

「なんて滑稽なんでしょう！」と、ジナイーダは何度も言つて、「眼だつて灰色でなくて、緑色だし、それに耳だつてなんて大きいんでしょう！　ありがとう、ペロヴゾーロフさん！　あなたとても親切ねえ！」

その軽騎兵は、昨日見かけた青年たちの一人であることにわたしは気づいたが、につこり笑つて一礼する拍子に、拍車を打合せて、サーベルの釣輪をがちやりと鳴らした。「昨日あなたは、縞の子猫で大きな耳をしているのが欲しいと仰せでありましたから……このとおり、手に入れたのであります。男子の一言——でありますから」と言つて、また一礼した。

子猫はかぼそい鳴き声を立てると、床を嗅ぎ始めた。

「おなががすいてるのね!」と、ジナイーダは叫んで、——「ヴォニファーチイ、ソーニヤ! 牛乳を持って来て」

小間使は、古ぼけた黄色い服に、色のさめたネツカチーフを首に巻いて、牛乳の小皿を手に入ってくると、その皿を子猫の前に置いた。子猫はぴくりと身震いして、眼を細め、ぴちゃぴちなめだした。

「まあ、バラ色の小つちやな舌」と、ジナイーダは、頭が床に届かんばかりに身をかがめ、横合いから猫の鼻の下をのぞきこみながら、そう指摘してきした。

子猫はおながくちくなると、すまし返って前足をかわるがわる動かしながら、喉のどを鳴らし始めた。ジナイーダは立ち上がって、小間使の方を振向くと、平気な声で、「あつちへ持っておいで」と言った。

「子猫の褒美ほうびに——お手を」と、軽騎兵は、にやりと笑うと、新調の軍服にきっちり締め上げられた逞たくましい全身を、ぐいと反り返らせた。

「両方よ」と、ジナイーダは答えて、彼に両手を差伸さしのべた。軽騎兵がキスしている間、彼女は肩越しにわたしを見ていた。

わたしは一ひととところにじつと立ったまま——いったい笑ったものか、何か言ったものか、

それともこのまま黙^{だま}っていたものか、それがわからなかった。すると突^{とつ}然^{ぜん}、控え室のあけっぱなしのドア越^こしに、うちの下男のフョードルの姿が眼に映った。わたしに何かを合図している。わたしは何気^{なにげ}なく出て行つた。

「なんだい！」と、わたしは訊いた。

「お母様がお呼びするようにおっしゃいましたんで」と、彼はひそひそ声で、——「あなた様が返事を持ってお帰りにならないので、大層お腹立ちでございますよ」

「でも僕、そんなに長居^{ながい}したかい？」

「一時間の余になります」

「一時間の余！」と、思わずわたしは鸚鵡^{おうむがえ}返しに言つて、客間へ引返すと、お辞儀^{じぎ}したり足ずりしたりし始めた。

「どこへいらつしやるの？」と公爵令嬢が、軽騎兵の後ろから顔をのぞかせて聞いた。

「僕、うちへ帰らなくちやならないのです。じゃ、こう申しましょうか」と、老夫人に向つて言い添^そえた。——「一時過ぎにお見えになりますつて」

「そうね、そう申上げて下さい、坊ちゃん」

公爵夫人があわただしく煙草^{たばこい}入れを出して、うるさい音を立てて嗅ぎ始めたので、わた

しはぎよつとしたほどだった。——「そう申上げて下さい」と、彼女は、うるんだ眼でまばたきして、ふんふん唸りながら繰返した。

わたしはもう一遍お辞儀をすると、くると回れ右をして部屋を出たが、照れくさい感じが背中を這っていた。後ろから見られていることがわかつている時、ごく若い人が感じるあれである。

「よくつて、ムツシユー・ヴォルデマール、また遊びにいらつしやいね」と、ジナイーダは叫ぶと、また大声で笑い出した。

なぜあの人は笑ってばかりいるんだろう？ と、わたしは、帰るみちみち考えた。お伴にはフョードルが、一言もわたしに話しかけずに、不服らしい様子で後ろからついてくる。母はわたしを叱りつけて、あの公爵夫人なんかの所で何をいつまでしていたんだろうと、呆れ返っていた。わたしは何とも答えずに、自分の部屋へ引込んだ。すると突然ひどく悲しくなった。……わたしは泣くまいと懸命になった。……あの軽騎兵がねたましかったのである。

五

公爵夫人は約束通り母を訪ねて来たが、母の氣に入らなかつた。わたしは二人の

会見の場に居あわさなかつたけれど夕食の時母が父に物語った言葉によると、あのザセー

キナという公爵夫人は、どうもひどく俗っぽい女らしく思われる。あの夫人は、どうぞ

自分のためにセルギイ公爵に運動してくれとしつこくせがんで、ほとほと母をうんざりさ

せた。あの夫人はしよっちゅう何かしら訴訟や事件を起こしていて——それも卑し

い。金銭問題なのだから——てつきりとんでもない食わせ者に違いない、といった

散々の評判だつた。それでいながら母は、あの夫人を娘さんと一緒に明日の夕食に招い

た、と言ひ足した（この『娘さんと一緒』という言葉が耳にすると、わたしは鼻を皿の中

へ突っ込まんばかりにした）——とにかくあの夫人は隣どうしではあり、名のある人でも

あるから、というのが理由だつた。

これに対して父は母に、今やつとあの奥さんがどういう人かを思い出したと告げた。そ

れによると父は若い頃、今は亡いザセーキン公爵を知つていた。立派な教育はあつたけれ

ど、薄っぺらな下らん男で、パリに長らく行つていたため、『パリっ児』と呼ばれていた。

彼は大層金持だつたが、カルタで全財産をすつてしまい——どういふわけだか、まあ金が

目当てだったらしくも思えるが——とは言え選びさえすれば、もつといい相手はあったのに（と父は言い足して、冷たい微笑を漏らした）——どこかの下役人の娘と結婚して、その結婚ののち、投機に手を出して、今度は完全に破産してしまった。

「どうぞあの夫人が、お金を貸してくれなどと言い出さなけりやいいが」と、母はすかさず言った。

「それも大いにあり得ることだね」と、父は平然として言った。——「あの奥さん、フランス語を話すかね？」

「それが成っていないの」

「ふん。まあ、そんなことはどうでもいい。君は今、あの人の娘さんも招待したとか言ってたね。誰かが言っていたつけが、とても可愛らしい、教育のある娘だそうじゃないか」

「へえ！　じゃその娘さん、お母さんに似なかったわけですね」

「父親にもね」と、父は応じて、——「あの男は教育こそあったが、しかし頭がなかったよ」

母はほつと溜息をついて、考え込んでしまった。父も黙ってしまった。わたしはこの会話の間じゅう、ひどく照れくさかった。——

夕食が済むと、わたしは庭へ出て行つたが、鉄砲は持たなかった。わたしは、『ザセーキン家の庭』へは近寄るまいと心に誓つたつもりだったが、うち勝ちがたい力に引かされて、ふらふらその方へ足が向いて——しかもそれが、無駄ではなかった。わたしが垣根のそばまで行くか行かないうちに、ジナイーダの姿が眼に入つたのだ。今度は彼女一人だった。両手で小さな本をささえて、ゆつくり小径を歩いていた。向うはわたしに気づかなかった。

わたしはあやうくやり過ぎそうになつたが、はつと気がついて、咳払いをした。

彼女は振向いたが、立ち止りもしないで、まるい麦わら帽子についている幅の広い水色のリボンを、片手で払いのけると、ちらとわたしに眼をそそぎ、軽くほほえんだなり、まともや眼を本へ落してしまつた。

わたしは底のついた帽子を脱いで、しばらくその場で迷つていたが、やがて重い物思いに沈みながら、そこを離れた。——『あのひとにとつて、わたしはなんだろう？』とわたしは、(どうした風の吹きまわしか)フランス語で考えた。

聞き覚えのある足音が、後ろで響いた。振返つてみると——こっちへ、例の速い軽快な足どりでやってくるのは、父だった。

「あれが公爵令嬢かね？」と、父が尋ねた。

「お嬢さんです」

「はて、お前あの人を知ってるのかい？」

「けさ公爵夫人の所で会ったんです」

父は立ち止ったが、急に踵でくると、とって返して行った。そして、垣根越しにジナイーダと肩を並べる辺まで行くと、父は丁寧に彼女に会釈をした。彼女も会釈を返したが、幾分びつくりしたような色を顔に浮べて、本を下へおろした。父の後ろ姿を見送っている彼女の様子が、わたしには見えた。わたしの父の服装はいつも、とてもりゆうとして、独特の味があつて、しかもさっぱりしたものだった。けれどこの時ほど父の姿がわたしに、すらりと格好よく見えたこともなかったし、その灰色の帽子が、ころもち薄くなりかけた捲毛の上に、すつきり合つて見えたこともなかった。

わたしはジナイーダの方へ行こうとしたが、彼女はわたしには眼もくれず、また本を上げると、向うへ行つてしまった。

六

その晚いっぱいとあくる朝の間じゆう、わたしはなんだか鬱々うつうつと沈み込んだ気持ちで過した。忘れもしない、わたしは勉強しようと思つて、カイダノーフを読み始めたが——結局この有名な教科書のぱらりと組んだ行やページが、眼の前にちらちらするばかりで、なんにもならなかった。十遍じっぺんも立て続けにわたしは、『ユリウス・ケーザルは武勇世にすぐれ』という文句を読み下したが——何ひとつ頭に入らないので、本を投げ出してしまった。夕飯の前になると、わたしはまたポマードを塗りたくつて、またもやフロックコートとネクタイを着けた。

「そりや、どういうつもりなの？」と、母が尋ねた。——「お前はまだ大学生じゃないんですよ。それに、試験だつて受かるかどうか知りもしないのにさ。あの短い上着だつて、まだついこのあいだ縫ぬわせたばかりじゃないか？ 勿体もったいないですよ！」

「お客様が来るので」とわたしは、ほとんど必死になつてささやいた。

「馬鹿ばかをお言い！ あれがお客様なものですか！」

降参するよりほかはなかった。わたしはフロックを短い上着に着替きえたが、ネクタイは取らなかつた。

公爵夫人は娘を連れて、夕食の三十分前にやって来た。老婦人は、すでにわたしにはお馴染みの例の緑色の服の上に黄色いシヨールを引っかけ、火のような色のリボン飾りのついた旧式の室内帽をかぶっていた。彼女はたちまち手形の話をやり出して、溜息をついたり、自分の貧乏を訴えたり、『おねだり』を始めたりするのだったが、礼儀も作法もさっぱりお構いなしで、相変らず騒々しく嗅ぎ煙草を嗅いだり、椅子の上で気まま勝手に身をねじ曲げたり、もぞもぞしたりしていた。自分が公爵夫人だなどということ、てんで念頭に浮んでも来ないらしい。

それに引替えジナイーダは、すこぶるツンと、ほとんど傲慢なほどに構えて、あつぱれ公爵令嬢であつた。その顔には、冷やかな、ぴくりともしない尊大な表情が表われていたので――わたしにはまるで別人のように見え、あの眼差しもあの微笑も、てんで見当らなかつたけれど、それでいてこの新しい姿になつても、わたしにはやはり素晴らしきお嬢さんと思われた。着ているのは、ふわりとした薄い紗の服で、淡青い唐草模様がついていた。髪はイギリス風に、長い房をなして両の頬に垂れかかっていた。この髪が、彼女の顔の冷やかな表情に、しつくり合っていた。

父は食事の間、彼女の横に席を占めて、もちまえの優美で落着きはらつた慇懃さで、

隣席の令嬢のお相手をつとめていた。父は時おり彼女の顔をちらりと眺めやる——彼女の方でも、時たま父を見返す。その彼女の顔つきが、じつに不思議な、ほとんど敵意をふくんだものだ。二人はフランス語で話し合っていたが、わたしは今でも思い出す、ジナイーダの発音の奇麗さに、びつくりしたものである。公爵夫人は食事の間も、例によつてちつとも遠慮せずに、さかんに食べては、料理を褒めそやした。母は、いかにもこの相手が荷厄介らしく、なんだか滅入ったような気乗りのしない調子で、しぶしぶ受け答えをしていた。父は時たま、かすかに眉の根をひそめた。ジナイーダもやはり、母の氣に入らなかった。

「なんだか高慢ちきな娘だこと」と、母はあくる日そう言った。——「よく考えてみるがいいわ——何を高慢ぶることがあるんだろう——あんなグリゼットみたいな顔をしてさ！」

「君は確か、パリの下町娘を見たことがないはずだが」と、父はチクリと刺した。

「ええ、ありがたいことにね！」

「もちろん、ありがたいことには違いないが……だが、それでどうしてあれらのことを、とやかく言えるのかね？」

わたしの方へは、ジナイーダはてんで注意を向けずじまいだった。食事が済むと間もなく、公爵夫人は別れの挨拶あいさつをし始めた。

「どうぞ今後とも、よろしくお力添ちからぞえのほどを、奥様おくさまにも旦那様だんなさまにもお願いしますよ」と、彼女は、歌うように声を引っぱりながら母と父に言った。——「仕方ありませんわ！ いい時もありましたけれど、返らぬ昔でしてねえ。これでもとは——奥方様と立てられたものですけど」と彼女は、いやな笑い声を立てて言い添えて、——「背に腹は、とやら申しましてねえ」

父はうやうやしく夫人に一礼すると、控ひかえ室しつのドアまで腕うでを貸して送って行った。わたしは、つんつるてんの短い上着を着たまま、じつとそこに突つつ立たって、死刑しけいを言い渡わたされた囚しゅうじん人ひとよろしくのていで床ゆかを見つめていた。ジナイーダの冷たい態度を見て、すっかり悄しよげ気けてしまったのである。ところが、ああなんという驚おどろきだったろう。彼女はわたしの前を通り過ぎる時、例の優やさしい表情を眼まなこに浮うかべて、わたしにこうささやいたのだ、——

「今夜八時に、うちへいらつしやいね、よくって、きつとよ……」わたしはあまりの思いがけなさに、両手をひろげたが——それなり彼女は、白いスカーフをふわりと頭にかけると、さつさと向うへ行いってしまった。

七

きつかり八時に、わたしはフロックコートを一着におよび、頭の髪かみを小高く盛り上げて、公爵夫人こうしやくふじんの住家すみかなる傍屋はなれへ入って行つた。例の老僕ろうぼくが、無愛想な眼めでわたしをじろりと見ると、しゅしゅ腰掛こしかけから尻しりをもたげた。

客間には陽気な人声が聞えていた。わたしはそのドアをあけると、あつとばかり後ろへすさつた。部屋のまん中には、椅子いすの上に公爵令嬢れいじやうが突つ立ち上がつて、男の帽子ぼうしを眼の前に捧ささげている。椅子のまわりには、五人の男がひしめき合っている。彼らは我がちに帽子の中へ手をつ突つ込もうとするのだが、令嬢はそれを上へ上へと持ち上げて、力いっぱい揺すぶっていた。わたしの姿を認めると、彼女かのじよは大きな声で、「待つてよ、待つてよ！ 新しいお客様だわ、あの人にも札ふだをあげなくちゃ」と言うなり、ひらりと椅子から飛び下りて、わたしのフロックの袖そでの折返しをつかまえると、——「さあ、いらつしやいってば」と言つた。——「何をぼんやり立つてゐるの？ 皆さん《メシユ》、御紹介ごしょうかいいたしますわ。この方はムツシユ・ヴォルデマール、お隣となりの坊ちゃんぼっです。それからこち

らは」と彼女は、わたしに向つて順ぐりに客を指さしながら、付け加えた。「マレーフス
 キイ伯はくしやく爵、お医者いしやのルーシンさん、詩人のマイダーノフさん、退職大尉たいいのニルマーツ
 キイさん、それから軽騎兵けいきへいのペロヴゾーロフさん、この方にはもうお会いになったわね、
 どうぞ皆さん、仲よくなすってね」

わたしはすっかりあがつてしまつて、誰だれにもお辞儀じぎをせず^にいたほどだった。医者いしやのルー
 シンというのが、あとき庭でわたしに小つぴどく恥はじをかかした例の浅黒い男であるこ
 とはわかつたが、あとはみんな初対面だった。

「伯爵！」と、ジナイーダはあとを続けた。——「ムツシユー・ヴォルデマールにも札を
 書いて上げてちようだい」

「それは不公平ですな」と、心もちポーランドなまりのある言葉つきで、伯爵は反対した。
 これは頗る美貌すこぶの、凝こつた身なりをした栗色くりいろの髪かみの男で、表情に富んだ鳶色とびいろの目と、
 細い小ぢんまりした白い鼻をもち、小つぽけな口の上に、ちよび髭ひげを生はやしている。——

「この人、罰金ばつきんごつこの仲間に入らなかつたんですからねえ」

「不公平だ」と、ペロヴゾーロフと、もう一人別の男が相槌あいづちを打った。あとの方の男は、
 退職大尉と呼ばれた人物で、年は四十がらみ、みつともないほどのアバタ面づらで、アラビア

人みたいに髪の毛が縮れて、猫背で、かに股で、肩章のない軍服を着て、胸のボタンをはずしている。

「札を書いて上げなさいってば」と、令嬢は繰返した。――「そりやなんの暴動なの？ ムツシユー・ヴォルデマールは初めて一緒になったんだから、今日はこの人特別扱いよ。ぶつぶつ言わないで、書いてちょうだい、あたしそうしたいんだから」

伯爵は肩をすくめたが、素直に一礼すると、宝石入りの指輪で飾りたてた白い手にペンをとりあげ、小さな紙切れを裂き取って、それに書き始めた。

「ではせめてヴォルデマール氏に、ことの次第を説明して上げてもいいでしょう」と、嘲るような声でルーシンが言い出した。――「さもないと、すっかりまごついておられるようですからな。実はね、君、我々は罰金ごっこをしているんだが、令嬢が罰金を払うことになったので、幸運のくじを引当てた人は、令嬢のお手にキスする権利を得るわけなんです。わかったですか、僕の言ったことが？」

わたしはちらりと彼の顔を見たばかりで、相変らず茫然自失のていで突っ立っていたが、その間に令嬢はまた椅子の上に飛び乗ると、またもや帽子を揺すぶり始めた。みんなが手を伸ばしたので――わたしもそれに従った。

「マイダーノフさん」と令嬢は、背の高い青年に向って言った。これは痩せこけた顔に、小さな眼をしょぼつかせて、黒い髪の毛をおそろしく長く伸ばした男である。——「あなたは詩人なんですから、気前のいいところを發揮して、あなたの札をムツシュー・ヴォルデマールに譲^{ゆず}って上げるべきだわ。するとこの方のチャンスは二つになって、一つじゃなくなるんですもの」

がマイダーノフは、首を横に振^ふって、長髪^{ちようはつ}をさつと揺り上げた。わたしは一番あとから手を帽子の中へ入れて、つかんで、さて札をひろげてみたが……ああ！ 途端^{とたん}にふらつとしてしまった。見よ、その札には、『キス』と書いてあるではないか！

「キス！」と、わたしは思わず大声を上げた。

「ブラヴォー！ この人に当たったわ」と、令嬢がすかさず引取って——「まあ嬉しいい！」

——そして椅子を下りると、なんともいえず晴れやかな甘い顔^{あま}つきで、じつとわたしの眼をのぞきこんだので、わたしの心臓はワツとばかり踊^{おど}り立った。

「あなたは嬉しくって？」と、彼女はわたしに訊^きいた。

「僕？……」うまく舌が回らなかった。

「その札は僕に売ってくれたまえ」と、突然^{とつぜん}わたしの耳のすぐ上で、ペロヴゾーロフの

がらがらした声がした。――「百ルーブル出すぜ」

わたしが軽騎兵への返事に、非常な憤慨ふんがいの一聲いちべつをくれたので、ジナイーダは手をたたくし、ルーシンは「でかした!」と絶叫ぜつきようする騒ぎさわだった。

「それはそうと」と、ルーシンは続けた。――「わたしは式部官として、すべてが規定通り行われるよう宰領さいりようせねばなりません。ムツシュー・ヴォルデマール、片膝かたひざをおつきなさい。そういう決りになっているのです」

ジナイーダはわたしの前に立つと、わたしを一層よく見ようとするかのように首を少し横にかしげ、いとも莊重そうちように片手を差伸さしのべた。わたしは眼の中が暗くなった。片膝をつこうとしたが、べつたり両膝ついてしまつて、おそろしく不器用くちびるに唇をジナイーダの指に触ふれたので、むこうの爪つめで自分の鼻さきに、かるい引つかき疵きずをこしらえてしまったほどだった。

「よろしい!」とルーシンは叫さけんで、わたしを助け起した。

罰金ごっこは続いていった。ジナイーダはわたしを自分のそばの席に着かせた。手を変え品を変え、実にいろんな罰金を彼女は思いついたものである! そのうちに彼女は、『立像』をやつて見せることになつたが――すると彼女は自分の台座に、醜男ぶおとこのニルマ

ーツキイを選び出して、うつ伏せに寝るように命じたばかりか、顔を胸へたくし込ませさえしたものである。笑い声は小やみもなしに続いた。

四角四面の地主屋敷に生い立って、一人ぼっちの生真面目な教育を受けてきた少年のわたしは、こうしたらんちき騒ぎや、ほとんど狂暴ともいうべき無遠慮な浮かれ気分や、見ず知らずの連中との臍の緒切って初めての交際やお陰で、たちまち頭がカーツとなった。わたしは酒でも飲んだように手もなく酔っぱらってしまった。わたしがほかの誰よりも大きな声で、笑ったり喋ったりし始めたので、隣の部屋にいた老夫人までが、わざわざわたしを見に出てきたほどだった。夫人は、相談ごとのために呼び寄せたイヴェールスキイ門あたりの小役人と、何やら話し込んでいたのである。しかしわたしは、すっかりもう幸福感に酔いしれていたもので、誰が冷笑しようが誰が白い眼でにらもうが、下世話に言うとおりに、どこ吹く風で、一文の価値も認めなかった。

ジナイーダは相変らず、わたしをひいきにして、寸時もそばから離さなかった。ある罰金に当たった時、わたしは彼女と並んで、ひとつ絹のプラトークにくるまる羽目になったことがある。つまりわたしは、自分の秘密を彼女に打明けなければならないのであった。忘れもしない。わたしたち二人の頭が、突然もやもやした、半透明の匂やかな霧に包まれ

たかと思うと、その靄の中で、近々と柔らかに彼女の眼が光って、ひらたい唇が熱っぽく息づき、齒がだんだん見えてきて、ほつれ毛が焼けつくようにわたしの頬をくすぐった。わたしは黙っていた。彼女は神秘めいた狡そうな微笑を浮べていたが、やがて、「ね、どうしたの？」とささやいた。わたしは赤くなって、ふふと笑っただけで、顔をそむけ、じつと息を殺していた。

罰金ごっこに飽きると、——こんどは縄まわしが始まった。ああ！ わたしがついポカンとして、鬼になった彼女から、したたかピシヤリと指をぶたれたとき、なんとという法悦をわたしは感じたことだろう！ そのあとで、わざとわたしがポカンとした振りをしている、彼女はわたしをじらそうとして、差伸べた両手に触れようともしないのだった！

我々がその晩のうちにやったことは、まだまだそれだけではなかった！ ピアノも弾けば、歌もうたい、踊りもおどれば、ジプシーの群れの真似もした。ニルマーツキイは熊の縫いぐるみを着せられて、塩の入った水を飲まされた。マレーフスキイ伯爵は、トランプの手品を次から次へと披露したが、あげくの果てにカードをよく切ってから、札を四人に配る時、切札を全部わが手に収めてしまったので、ルーシンは『僭越ながら祝辞を述べ

る』ことになった。マイダーノフは自作の『人殺し』という長詩の一節を朗読したが、（それはロマンティズムの全盛期^{ぜんせいき}に取材してあった）、彼はこの作品を、黒い表紙に血色の題字で、出版するつもりだと言っていた。イヴェールスキ門からやって来た小役人の膝から、こっそり帽子を取ってきて、その身代金^{みのしろきん}としてカザーク踊りをおどらせた、老僕ヴォニファーチに女の室内帽をかぶせたり、——そうかと思うと、公爵令嬢が男の帽子をかぶつたり……とても一々数えきれない。ただペロヴゾロフだけは、眉間^{みけん}に八の字を寄せて腹立たしげな様子で、だんだん隅^{すみ}っこへ引つ込みがちになった。……時たま彼の眼は、さつと血ばしつて、満面に朱^{しゅ}をそそぎ、今にもみんなに躍りかかって、わたしを木^こつ端^はみじんに八方へ投げ飛ばしそうな剣幕^{けんまく}を見せたが、令嬢がちらりと彼を見て、指を立てておどかすと、彼はまたこそそこそ隅^{すみ}っこへ引き下がるのだった。

しまいに、さすがのわたしたちも精^{こん}も根^{こん}も尽き果ててしまった。公爵夫人は、御自身の言い草を借りると、そんなことには一向平気な性^{しょうぶん}分^{ぶん}で——どんなに騒^{さわ}がれようがビクともしないたちだったが——それでもやはり疲労^{ひろう}を覚えて、ちよつと一休み横になると言い出した。夜の十一時過ぎに夜食が出て、古いひからびたチーズの切れ^きっ端^はと、ハムを刻み込^こんだ妙^{みょう}に冷たい肉^{にく}饅^{まん}頭^{じゅう}とだけだったが、それがわたしには、どんなパイよりもお

いしく思われた。葡萄酒は一壺きりで、それも怪しげな、頸のところがふくれ返った
どす黒い代物で、中身はプーンと桃色のペンキの臭いがした。もつとも、誰一人それ
は飲まなかった。

疲労と幸福感とでへとへとになって、わたしは傍屋から表へ出た。別れにのぞんで、ジ
ナイーダはぎゅつとわたしの手を握りしめ、またもや謎めいた微笑を浮べた。

夜気がしつとりと重く、わたしの火照った顔へ匂いを吹きつけるのだった。どうやら雷
雨が来そうな模様で、黒い雨雲が湧きだして空を這い、しきりにそのもやもやした輪郭
を変えていた。そよ風が暗い木立の中でざわざわと身震いして、どこか地平のはるかな彼
方では、まるで独り言のように、雷が腹立たしげな鈍い声でぶつぶつ言っていた。

裏口からこつそり、わたしは自分の部屋へもぐり込んだ。守役の爺やが、床べたで眠
っていたので、わたしはそれをまたぎ越さなければならなかった。爺やは目をさまして、
わたしを見るなり、母がまたぞろわたしに腹を立てて、またも迎えに人を出そうとしたが、
父が止めたのだ、と報告した。（わたしは寢床に入る前には、必ず母にお休みを言い、祝
福してもらうことにしていた）が、こうなつてはもう仕方がない！

わたしは爺やに、自分で着替えをして寝るからいい、と言って——蠟燭を吹き消した。

だがわたしは、着替えもしなければ、横になりもしなかった。

わたしはちよつと椅子に掛けたが、それなり魔法にでもかかったように、長いこと坐つたままでいた。その間に感じたことは、実に目新しい、実に甘美なものだった。……わたしはほんの少しあたりへ眼を配りながら、じつと身じろぎもせずに坐つて、ゆつくりと息をついていた。そしてただ時々、声を立てずに思い出し笑いをしたり、そうかと思うと、『俺は恋しているのだ、これがそれなのだ、これが恋なのだ』という想念に突き当つて、胸の底がひやりとするのだった。ジナイーダの顔が眼の前の闇の中を静かに漂つていた――漂つてはいたが、漂い去りはしなかった。その唇は相変らず謎めいた微笑を浮べ、眼は少し横合いから物問いたげに、考え深そうに、優げにわたしを見まもっていた……あの別れた瞬間とそっくりそのままの眼差しだった。やがてとうとうわたしは立ち上がった、爪先だちでベッドに歩み寄り、着替えもせずに、そつと頭を枕にのせた。激しい動作によつて、身うちに充ち満ちているものを驚かしはせぬかと、それが心配でならなかったように……。

わたしは横になったが、眼もつぶらずにいた。まもなくわたしは、何かしら微かな照返しが、わたしのいる部屋の中へ、絶えず射しては消え射しては消えするのに気がついた。

……わたしは身をもたげて、窓をながめた。神秘めいてぼんやり白んでいるガラスの上に、窓の棧さんがくつきりと描えがき出されている。雷雨だな——とわたしは思った。確かに雷雨には違ちがいなかったが、とても遠方を通っているので、雷鳴も聞えないほどだった。ただ、光の鈍い、長々と尾おを引いた、枝えだに分れたような稲妻いなずまが、空にひらめいているだけで、それもひらめくというよりはむしろ死にかけている鳥の翼つばさのように、ぴくぴく震ふるえているのだった。わたしは起き上がって、窓のそばへ行き、朝までそこに立ち尽つくした。……稲妻はほんの束つかの間もやまなかった。俗にいう雀の夜——つまり夏至げしごろ頃の短か夜である。わたしは、ひっそり静まった砂原や、ネスクーチヌイ公園の黒々とした森もり陰かげや、鈍く稲妻がひらめくたびにやはり震えるように見える遠い家々の黄いろっぽい正面やを、じっと見つめていた。……見つめたまま——眼を離すことができなかった。そのひっそりした稲妻、その遠え慮しりょがちのひらめきが、同じくわたしの身うちにもひらめいている無言のひそやかな衝しやう動どうに、ちように相応ずるもののように思われた。夜が明け始めた。朝焼けがそこここに真紅しんくのまだらを散らした。日の出が近づくにつれて、稲妻はだんだん淡あわく、短くなっていた。そのわななきはいよいよ間遠まどおになつて、ついに、はつきり明けはなれた一日の、もの皆みなの夢ゆめをさます疑いもない光にひたされて消えてしまった。

わたしの胸の中でも、やはり稲妻は消えてしまった。わたしは非常な疲^{つか}れと静けさを感じたが……ジナイーダの面影^{おもかげ}は相変らず飛びめぐって、わたしの魂^{たましい}の上に凱歌^{かいが}を奏していた。ただしその面影も、いつかひとりで安らいできたように見えた。さながら白鳥^{ぬま}が、沼の草むらから飛び立ったように、その面影もまた、それを取巻いているさまざまな醜^{みにく}い物陰から、離れ去ったものようだった。そしてわたしはうとうと寝入りながら、これを名残^{なご}りにもう一遍^{いっぺん}、信頼をこめた崇拜^{すうはい}の念をもつて、その面影にひとばかりとりすがった。……

おお、めざまされた魂の、つつましい情感よ、その優しい響^{ひび}きよ、そのめでたさと静もりよ。恋の初めての感動の、とろけるばかりの悦^{よろこ}びよ。——汝^{いまし}らはそも、今いずこ、今いずこ？

八

あくる朝、わたしがお茶に下りてゆくと、母はわたしを叱^{しか}ったけれど——思ったほどのことはなく、ゆうべどんな風にして過したかを、わたしに話をさせた。わたしは言葉少な

に応答しながら、細かな点はどしどしはぶいて、全体として大いに無邪気な感じを与えるようにつとめた。

「とにかくあの人たちは、コム・イル・フォーまともな連中じやありません」と、母は釘をさした。――「だからお前も、あんなところへ出入りする代りに、ちゃんと勉強して、試験の準備をするんですよ」

わたしの勉強に対する母の配慮が、わずかこの数語に尽きていることは、わたしも心得ているから、別に口答えをする必要はないと思った。ところがお茶が済むと、父はわたしと腕を組んで、一緒に庭へ出て行きながら、わたしがザセーキン家で見たことを、逐一わたしに物語らせた。

父はわたしに、奇妙な影響力を持つていたし、そう言えば、互いの関係にしたところで、やはり奇妙なものだった。父はわたしの教育のことには、ほとんど風馬牛だったか、さりとてわたしを馬鹿にするような真似は、ついぞしたことがない。父はわたしの自由を尊重していたばかりか、更に進んで、ちよつと妙な言い方だが、わたしに対して慇懃でさえあった。……ただし、近くへは寄せつけてくれないのである。わたしは父を愛し、父に見とれて、これこそ男性というものの典型だと思っていた。だから、実際の話

が、わたしはもつと強く強く、父になついたはずなのだが、ただ父の手が私を押しのけているような感じが、しょっちゅうあつて、それが邪魔になつたのだ！ その代り、父さえその気になれば、ほとんど一瞬にして、ただの一言、ただの一動きでもつて、父に対する無限の信頼感を、わたしの胸に呼びますことができました。わたしは心をあけひろげて、まるで相手が聡明な友達か、親切な先生でもあるように、父とおしゃべりを始めるのだが……やがてまた不意に、父はわたしをほうり出してしまふ。——またしてもその手がわたしを押しつける。いかにも愛想のいい、もの柔らかな手つきだが、とにかく押しつけるのである。

父も時には、浮き浮きした気分になることがあつて、そうなると私を相手に、まるで子供のように、ふざけたり、はねたりするのをいとわなかつた（父は、激しい肉体の運動なら、なんでも好きだつた）。一度——あとにも先にも唯の一度きりだが！——父がとても優しくわたしを可愛がつてくれて、そのため危うくわたしが泣き出しそうになつたことがある。……しかし、その浮き浮きした気分も、優しさも、すぐまた跡かたもなく消えて、——現に二人の間に起つた事柄から、何かしら今後の期待を引出すなどということは、とてもできない相談だつた。まあ何もかも、夢で見たようなものだつたのだ。よくわたし

は、父の賢^{かしこ}そうな、美しい、澄^すみきつた顔を、じつと見ているうちに……胸がどきどきしてきて、身も心も父の方へ吸い寄せられるような気がした。……すると父は、そういう私の氣持に感づきでもしたようにひよいと通りすがりに私の頬^ほをかるく叩^{たた}いて、——それなり向うへ行つてしまふか、何か仕事をやり出すか、さもなければ、いきなり頭から足の先まで、凍^こりついたように冷たくなつてしまふ。その冷たくなりようときたら、ほかの人には見られない父独特のもので、それを見せられると私はたちまち縮み上がつて、やはり寒々とした氣持になるのだつた。

ごく稀^{まれ}に、父は発^{はつ}作的^{さてき}にわたしに好意を示しはしたが、それは決して、口にこそ出さないが一目でそれと察せられる私の哀^{あい}願^{がん}によつて、ひき起されたものではない。それは、いつも決つて、不意に起るのだつた。あとになつて、父の性格をいろいろ考えてみたあげく、わたしの達した結論は、父としては私や家庭生活なんぞを、顧^{かえり}みるひまがなかったということである。父は、ある別のものを愛していて、その別のもので、すっかり堪^{たんのう}能^うしていたのである。

『取れるだけ自分の手でつかめ。人の手にあやつられるな。自分が自分みずからのものであること——人生の妙^{みよ}趣^{うしゆ}はつまりそこだよ』と、ある時父はわたしに語つた。また別

の時、わたしは若き民主主義者として、父の面前で、とうとうと自由を論じ始めたことがある（父はその日は、わたしの当時の言い方でいうと「優し」かった。そんな時には、どんな話を持ち出そうと勝手だった）。

「自由か」と、父は引取つて、「だがね、人間に自由を与えてくれるものは何か。お前それを知っているかね？」

「なんです？」

「意志だよ、自分自身の意志だよ。これは、権力までも与えてくれる。自由よりもつと貴い権力をね。欲する——ということができたら、自由にもなれるし、上に立つこともできるのだ」

父は、何よりもまず、そして何にも増して、生活することを欲した。そして実際、生活したのだ。……ひよつとすると父は、自分が人生の「妙趣」をあまり永く享樂できないことを予感していたのかもしれない。四十二で死んだのである。

わたしは、ザセーキン家を訪問した時の一部始終を、詳しく父に話して聞かせた。父はベンチに腰掛けて、鞭の先で砂に何やら書きながら、半ばは注意ぶかく、半ばは放心のていで、わたしの話を聴いていた。父は時々笑い声を立てて、一種こう晴れやかな、面白

そんな眼つきで私の顔をちらりと見たり、ちよつとした質問やまぜつ返しで、わたしを焚きつけたりした。初めのうちは私は、ジナイーダの名前をさえ口にする勇氣が出なかったが、やがて我慢がなくなつて、しきりに彼女のことを褒めちぎりだした。父は相變らず笑い続けていたが、そのうちにふと考え込んだかと思うと伸びをして、立ち上がった。わたしは、父が家から出しなに、馬に鞍を置くように命じたのを思い出した。父の馬術はなかなか大したもので、レーリ氏などよりずっと早くから、どんな荒馬をも馴らすのに妙を得ていた。

「僕も一緒に行つていい、パパ？」と、わたしは父に訊いた。

「いいや」と父は答えた。その顔には、例の素つ気ない愛想のいい表情が浮んだ。――
「乗りたけりや、一人でお行き。そして、わたしは行かないからつて、別当にそう言つとくれ」

父はわたしに背を向け、足ばやに立ち去つた。わたしが見送つてみると、父の姿は門の外へ消えた。垣根に沿つて、帽子の動いて行くのが見える。父はザセーキン家へ入つて行つた。

父は、一時間以上はそこにいなかったが、それからすぐさま町へ出かけ、夕方やつと帰

つて来た。

夕食のあとで、今度は私がザセーキン家へ行つた。客間に入つてみると、老公爵夫人きりしきいかなかった。わたしの姿を見た夫人は、室内帽子をかぶつた頭を、編み針の先で搔くと、いきなりわたしに向つて、請願書を一通清書してもらえまいかと問ひかけた。

「おやすい御用ですとも」と、わたしは答えて、椅子の端に腰を下ろした。

「ただね、字をなるべく大きくお願いしますよ」と公爵夫人は、べったり書き汚した紙を一枚わたしながら言つた。――「で、今日じゆうにやつて下さらなくて、坊ちゃん？」

「やりますとも、今日じゆうに」

隣の部屋のドアがほんのちよつぴり開いて、その隙間に、ジナイーダの顔が現われた。

――蒼ざめた、もの思わしげな顔つきをして、髪は無造作に後ろへはね返してある。大きな冷やかな両眼で、わたしをじつと見ると、またそつとドアを閉めた。

「ジーナ、これ、ジーナや！」と、老夫人が呼んだ。ジナイーダは返事をしなかった。わたしは老夫人の請願書を持つて歸つて、一晚じゆうそれにかかりきりだった。

九

わたしの「情熱」は、その日から始まった。忘れもしない、——その時わたしは、初めて就職した人が感じるはずの、あの一種の気持と同じものを味わった。つまりわたしは、もはやただの子供でも少年でもなくて、恋する人になったのだ。今わたしは、その日からわたしの情熱が始まったと言ったが、も一つその上に、わたしの悩みもその日から始まったと、言い添えてもいいだろう。

ジナイーダがいないと、わたしは気が滅入った。何ひとつ頭に浮んでこず、何ごとも手につかなかった。わたしは何日もぶつつづけに、明けても暮れても、しきりに彼女のことを思っていた。わたしは気が滅入った……とはいえ、彼女がいる時でも、別に気が楽になつたわけではない。わたしは嫉妬したり、自分の小っぽけさ加減に愛想をつかしたり、馬鹿みたいにすねてみたり、馬鹿みたいに平つくばったり、——そのくせ、どうにもならない引力で彼女の方へ引きつけられて、彼女の居間の敷居をまたぐ都度、わたしは思わす知らず、幸福のおののきに総身が震えるのだった。ジナイーダはすぐさま、わたしが彼女に恋していることを見抜いたし、わたしの方でも、別にそれを匿そうとも思わなかった。

彼女は、わたしの情熱を面白^{おもしろ}がつて、わたしをからかったり、甘やかしたり、いじめたりした。いったい、他人のために、その最大の喜びや、その底知れぬ悲しみの、唯一無二^{ゆいいつむに}の源泉になつたり、またはそれらの、絶対至上にして無責任な原因になつたりするのは、快いものであるが、全く私は、ジナイーダの手にかかったが最後、まるでぐにやぐにやな蟬^{せみ}みたいなものだったのだ。

とはいえ、何もわたしだけが、彼女に恋していたわけではなかった。彼女の家によつてくる男という男は、みんな彼女にのぼせあがつていたし、彼女の方では、それをみんな鎖^{くさり}につないで、自分の足もとに飼^かつていたわけなのだ。そうした男たちの胸に、あるいは希望を、あるいは不安を呼びおこしたり、こつちの気の向きよう一つで、彼らをきりきり舞^まいさせたりするのが（それを彼女は、人間のぶつけ合い、と呼んでいた）、彼女には面白くてならなかったのである。しかも男たちの方では、それに抗議^{こうぎ}を申し立てるところか、喜んで彼女の言いなりになつていたのだ。澆刺^{はつらつ}として美しい彼女という人間のなかには、狡さ^{ずる}と暢気さ^{のんき}、技巧^{ぎこう}と素朴^{そぼく}、おとなしさとやんちゃさ、といったようなものが、一種特別な魅力^{みりよく}ある混り合いをしていた。彼女の言うことなすこと、彼女の身ぶり物ごしのはしはしにも、微妙^{びみょう}な、ふわふわした魅力が漂^{ただよ}つて、その隅々^{すみずみ}にまで、他人には真似^{まね}ので

きぬ、ぴちぴちした力が溢^{あふ}れていた。彼女の顔つきも、しよっちゆう変つて、やはりぴちぴちしていた。それはほとんど同時に、冷笑を表わしもすれば、物思いを表わしもし、情熱の表情にもなるのであつた。まるで晴れた風のある日の雲の陰^{かげ}のように、軽いすばしこい色とりどりの情感が、絶えず彼女の眼^めや唇^{くちびる}のほとりに、ちらついているのだつた。

彼女にとつて、自分の崇拜^{すうはい}者は誰^{だれ}もかれも、みんな入用な人物だつた。ペロヴゾーフは、彼女から時によつては、『わたしの猛獸^{もうじゆう}さん』と呼ばれたり、時によつては簡単に、『わたしの』と呼ばれたりしていたが、彼女のためとあらば火の中へも飛び込み^こかぬ男である。自分の頭の働きにも自信はなし、ほかにこれといった取柄^{とりえ}もないとあきらめている彼は、しよっちゆう彼女に結婚^{けっこん}を申込んで、ほかの男の言うことは、要するに空念仏^{からねんぶつ}に過ぎないと、ほのめかすのであつた。

マイダーノフは、彼女の魂^{たましい}のなかにある詩的な素質のお相手をつとめていた。ほとんどすべての文士の多分に漏れ^もず、彼もかなり冷たい人間だつたが、それでいて自分がジナイーダを崇拜^{しやにむに}しているものと、遮二無二相手に思い込ませようとしていたのみか、どうやら自分でも、そう思い込もうとしているらしかった。無尽蔵^{むしんぞう}ともいうべき詩句に、彼女への讃美^{さんび}の情を託^{たく}しては、それを、どこかしら不自然でもあれば真剣^{しんけん}でもある感激^{かんげき}をも

って、彼女に朗読して聞かせる。彼女の方では、この男に共鳴する面もあり、いささかおひやかかし気味でもあった。あまりこの男を信用していない彼女は、彼の真情の吐露とろもい加減聞き飽あきると、プーキシンを朗読させるのだった。それは、彼女の言い草に従えば、空気を清めるためだった。

次にルーシンは、皮肉屋で、露骨ろこつな毒舌どくぜつをふるう医者だが、彼女というものを一番よく見ており、また誰より深く彼女を愛してもいながら、そのくせ陰でも面前でも、彼女の悪口ばかり言っていた。彼女は、この男を尊敬してはいたものの、さりとして決して容赦ようしゃはせず、時々、一種特別な、さも小気味よげな満足の面持おももちで、彼だつてやはり自分の手の中にあるのだということを、彼に感づかせるように仕向けるのだった。

「わたし、コケツトなのよ。人情なんかないわ。まあ、役者向きの水性みづしやうなんだわ」と、彼女はある日、わたしのいる前で、彼に言ったことがある。——「あ、いいことがある！ さ、手を出しなさい。ピンを突つつ刺さしてあげるから。するとあなたは、この坊ちゃんぼっちゃんの手前は恥はずかしいでしょうし、それに痛くもあるでしょう。でもね、あなたは笑って見せてちょうだい。いいこと、君子くんしさん」

ルーシンは赤くなつて、顔をそむけ、唇をかみしめたが、結局その手を差出した。彼女

がピンを突つ刺すと、まさしく彼は笑い出した。……彼女も声を立てて笑いながら、そのピンをかなり深く刺しこんで、むなしくあちこち外らそうとする彼の眼を、じつと覗き込むのだった。……

ジナイーダとマレーフスキイ伯爵はくしやくの関係が、一番わたしにはわかりにくかった。なかなか美男子で、如才じよさいなく頭のはたらく男なのだが、しかし、ほんの十六歳さいの少年にすぎないわたしでさえ、この男には何かしら油断のならぬ、うさん臭くさいところがあるような気がした。しかもジナイーダが、それに気づいていないのが、わたしは不思議でならなかった。ひよつとすると彼女は、そのうさん臭さに気づいていながら、別にそれが厭いやでなかったのかもしれない。なにしろ教育も変則なら、つきあいや習慣も風変りだし、しよっちゆう母親はそばにいるし、家の内情は貧乏びんぼうで乱脈だし、かてて加えて、若い娘むすめの身で気まま勝手はしたい放題、それに、ぐるりの連中より一段も二段も上だという意識もあるし——というわけで、そうした一切合財いっさいがっさいがあわさって、彼女のうちに、一種こう人を小馬鹿にしたような無頓着むとんじやくさや投げやりな態度を、養ったのである。何事がもちあがろうが——よしんばヴォニファーチが入って来て「砂糖がきれました」と言上ごんじやうに及ぼうが、何か忌わしい世間の陰口が耳に入ろうが、客の中で喧嘩けんかが始まろうが——彼女はただ、

豊かな捲髪まきげを一振りひとふして、「くだらない」と言うだけで、けろりとしていた。

お陰でわたしは、全身の血がカツと燃え立つような思いをすることが、よくあった。たとえばマレーフスキイが、まるで狐きつねみたいに狡さうそうに肩を揺ゆすりながら、彼女のそばへ寄って行つて、彼女の掛けている椅子いすの背に、伊達だてな格好かつこうをしてもたれかかり、さも得意げな、追従ついでたらたらの薄笑うすわらいを浮うかべながら、彼女の耳に何かささやきだす。すると彼女は、両手を胸に組んで、まじまじと彼を見つめながら、やがて自分も微笑を浮べ、首を振ったりするのである。

「あなたは、どこが好よくて、マレーフスキイさんなんかを家へ入れるのです？」と、ある時わたしは彼女に訊きいてみた。

「だって、あの人の髭ひげ、すてきじゃなくて！」と、彼女は答えた。——「でもそんなこと、あなたの知ったことじゃないわ」

また別の時、彼女はわたしに、こう言ったことがあった。

「わたしがあの人を愛していると、あなた思っているのじゃない？ 違ちがうわ。わたし、こっちで上から見下ろさなくちゃならないような人は、好きになれないの。わたしの欲ほしいのは、向うでこつちを征服せいふくしてくれるような人。……でもね、そんな人にぶつかりっこは

ないわ、ありがたいことにね！ わたし、誰の手にもひっかかりはしないわ、イイーだ」

「すると、決して恋をしないというわけですね」

「じゃ、あなたをどうするの？ わたし、あなたを愛していなくって？」 そう言うとき彼女は、手袋てぶくろの先で、わたしの鼻をたたいた。

全くジナイーダは、さんざんわたしを慰なぐさみ物にした。三週間の間、わたしは毎日彼女に会っていたが、その間に彼女がわたしに向ってやらなかったことは、何一つ、全く何一つなかった、と言つていいほどだ！ 彼女の方でわたしの家へ来ることは、あまりなかったが、それはわたしにとつて痛事ではなかった。うちへ来ると、彼女はたちまち、令嬢れいじやう

——つまり公こうしやく爵令嬢に、早変りしてしまうし、こつちでも彼女を敬遠すこぶしていた。わたしは、母に見破こわられるのが怖かったのだ。母はジナイーダに頗すこぶる悪意をいだいて、まるで仇かたきのようにわたしたちを見張つていた。父の方は、大して怖くなかった。父は、わたしには気がつかない様子だったし、彼女ともあまり話をしなかったが、いざ話す時には、何か特別に氣きの利いた、もつともらしい話しぶりをしていた。

わたしは、勉強も読書もやめてしまった。郊外こうがい散歩や乗馬までも、やめてしまった。まるで足に糸をつけられたカブト虫みたいに、わたしはなつかしい傍屋はなれのまわりを、絶え

ずぐるぐる回っていた。いいと言われれば、いつまでだってそこにいたはずだが……そう
 はいかなかった。母の小言ここともうるさいし、時には当のジナイーダから、追っ立てを食う始
 末だった。するとわたしは、自分の部屋へ引っこもるか、それとも庭のいちばん端まで行
 って、石造りの高い温室の崩れ残りへよじ登って、道路に面した壁かべから両足をぶらさげ、
 何時間も坐すわったなりで、一心に眺ながめに眺めるのだったが、そのくせ何ひとつ目に入らな
 った。わたしのそばには、埃ほこりをかぶったイラクサの上を、ものうげに白い蝶ちようちよう々が飛び
 かわしていた。元気な雀すずめが一羽いちわ、少し先の、半ば割れた赤煉瓦あかれんがの上に止って、絶えず全
 身をくるくる回し、尾おをひろげて、癩かんにさわる鳴き声を立てていた。相変らず疑ぐりぶか
 い鴉からすの群むれが、すっかり葉の落ちた白樺しらかばの高い高いてっぺんに止って、思い出したよう
 にカアカア鳴いていた。太陽と風が、そのまばらな枝えだの間に、静かにたわむれていた。ド
 ン修道院の鐘かねの音ねが、時おり、穏おだやかに陰気いんきに響ひびいてきた。——わたしはじっと坐おそって、
 見つめたり聞き入ったりしているうちに、何かしら名状しがたい感じで、胸がいつぱい
 なるのだった。その中には、悲しみも、喜びも、未来の予感も、希望も、生の恐おそれも、何
 から何までが含まふくれていた。けれど当時のわたしは、そんなものは何一つわかりもせず、
 また、自分の中に沸ふつ々とたぎっているすべてのもののうち、どの一つだって、それと名

ざすだけの力はなかったろう。いや、いつそ、その一切をあげて、ただ一つの名——ジナイーダという名でもって、呼んだかもしれない。

ところがジナイーダは、猫が鼠をおもちやにするように、相変らずわたしを弄んでいた。急にじやれついてきて、わたしを興奮させたり、うつとりさせたかと思うと、こんどは手の裏を返すように、わたしを突っぱなして、彼女に近寄ることも、その顔を眺めることも、できないような羽目に落してしまう。

忘れもしないが、彼女が二、三日ぶつ続けに、とても冷たい態度をわたしに見せたことがある。わたしはすっかり怖気づいて、こそそ彼女たちの傍屋へ這いこんでは、なるべく老夫人のそばに、くつついているようにしたものである。しかも折りも折り、夫人はひどく怒りつぽくなっていて、がなり散らしてばかりいたのだ。というのは、何か手形の件がうまくゆかないので、もう二度も、区の署長さんと掛け合ったところだったのである。

ある日、わたしが庭へ出て、例の垣根のそばを通りかかると、ジナイーダの姿が目にとまった。彼女は両手をわきについて、草の上に坐ったまま、身じろぎもせずにいる。わたしが、そつと遠ざかろうとすると、彼女はいきなり首を上げてきも命令するような合図をした。わたしは、その場に立ちすくんだ。どういうつもりなのか、一度では呑みこめな

ったのだ。彼女は、もう一いっぺん遍合図をした。わたしは、すぐさま垣根を飛びこえて、いそいそと彼女のそばへ駆け寄かつた。ところが彼女は、目でわたしを制して、彼女から二歩ほどのところにある小径こみちを、指さして見せた。どうしたらいいのかわからず、当惑とうわくして、わたしは小径の縁ふちにひざまずいた。見ると彼女の顔は真ま蒼さおで、なんとも言えず痛ましい悲哀ひあいと、深い疲れつかの色が、目鼻だちのくまぐまに刻まれているので、わたしは心臓が締めつけられるような気がして、思わずこう口走くちそうつた。「どうかしたのですか？」

ジナイーダは片手を伸のばして、何か草の葉をむしると、齒かで噛かんで、ぽいと向うへ投げた。

「あなた、わたしがとても好き？」と、やがての果てに、彼女は訊きいた。——「そう？」

わたしは、なんとも答えなかった。いまさら、なんの返事へんじをすることがあろう。

「そう」と、彼女はなおわたしを見つめながら、繰返くりかえした。——「そりや、そうだね。まるで同じ眼めだもの」そう言い足して、じつと考えこみ、両手で顔を隠かくした。やがて、「わたし、何もかも厭めになった」とささやくように言った。——「いっそ、世界の涯はてへ行いつてしまいたい。こんなこと、こらえきれないわ、とてもやってゆけないわ。……それに、行末ゆくすえはどうなるんだろう！ ……ああ、つらい。……ほんとに、つらい！」

「なぜですか？」と、わたしは、おずおず尋ねた。

ジナイーダは返事をせずに、ただ肩をすくめただけだった。わたしは膝をついたまま、すっかり悄気かえって、彼女を見まもっていた。彼女の一言一句は、鋭くわたしの胸に突き刺さった。わたしはその瞬間、もし彼女の悲しみが消えるものなら、喜んで命を投げ出しもしたろう。わたしは、彼女を見つめているうちに、なぜそう辛いのか合点がゆかぬながらも、それでいて、彼女がにわかには堪えがたい悲哀の発作に襲われて、庭へ出てきて、ぱったり地面に倒れた有様を、まざまざと心に描いていた。――あたりは青々と、光に満ちていた。風は木々の葉なみをそよがせ、時おり木苺の長い枝を、ジナイーダの頭上で揺すっていた。どこかで鳩が、ふくみ声で鳴き、蜜蜂はうなりながら、まばらな草の上を低く飛びかっていた。上には空が、優しく青みわたっているが、でもわたしは、なんとも言えずわびしかった。……

「何か、詩を読んでちょうだい」と、ジナイーダは小声で言って、片肘をついた。――「わたし、あなたが詩を読むところが好きなの。あなたのは、まるで歌うみたいだけれど、それで結構よ、若々しくっていいわ。あの、『グルジャの丘の上』を読んで。――でも、まずお座りなさいな」

わたしは腰を下ろして、『グルジヤの丘の上』（訳注 プーシキンがカフカーズをさまよいながら、遠い恋人を思つて作つた抒情詩。その大意は、「グルジヤの丘の上、夜露かかり、アラグヴァの流れ、わが前にざわめく。われはわびしく楽しく、わが悲しみは明るし。わが悲しみは、ただひとり君の姿にみたされて……このわびごころ、何ものの乱し騒がすものもなし。かくて胸は、またも燃え、恋いわたる……愛さでやまぬ胸なれば。」）を朗読した。

「《愛さでやまぬ胸なれば》」とジナイーダは繰返した。——「そこが、詩のいいところなのね。つまり、この世にないことを、言ってくれる。しかも、実際あるものより立派なばかりでなく、ずっと真実に近いことをまで、言ってくれるのだもの。……愛さでやまぬ胸なれば——ほんとに、しまいと思つても、せずにはいられないんだわ！」彼女はまた黙り込んだが、突然^{とつぜん}ぶるんと身を震^{ふる}わして立ち上がって、「さ、行きましょう。お母さんのところに、マイダーノフが坐り込んでいるのよ。わたしにとって、自分で作つた叙事詩^{じよし}を持つて来てくれたのに、ほっぴらかして来てしまったの。あの人も今頃^{いまごろ}は、きつと悄気^{せうき}てるわ。……でも、仕方がないのよ！ やがてあなただって、わかる時が来るわ……ただね、わたしのこと、怒^{おこ}らないでちょうだいね！」

ジナイーダは、せかせかとわたしの手を握ると、先に立って駆け出した。二人は傍屋に帰った。マイダーノフは、やっと印刷になったばかりの自作の詩『人殺し』を朗読したが、わたしはろくに聞いていなかった。彼は四脚の短長格を思いつきり声を引き引きがなり立てて、韻が入れかわり立ちかわり、まるで小鈴のような空ろで騒々しい音を立てたけれど、わたしはじつとジナイーダの顔を見たまま、彼女がついさつき言った言葉の意味を、しきりに考えていた。

さらずば、見知らぬ恋がたきが
にわかに君を奪いゆきしや？

と、いきなりマイダーノフが鼻声でわめいた時、わたしの眼とジナイーダの眼がぶつかった。彼女は伏眼になつて、顔を赤らめた。彼女が赤くなったのを見ると、わたしはびっくりして、五体が冷えわたった。わたしは、もう前々から彼女のことではなや妬いていたのだが、じつさい彼女が誰かに恋しているという考えは、やっとこの瞬間、わたしの頭にひらめいたのである。

『さあ大変だ！ 彼女は恋をしている！』

十

わたしの本当の責^{せめく}苦^くは、その瞬^{しゅん}間^{かん}から始^はまった。わたしは頭^{あたま}が痛^{いた}くなるほど考^{かん}えつめたり、思^{おも}案^{あん}を重^{おも}ねたり、考^{かん}え直^{ただ}したりしながら、勿^{もちろん}論^{ろん}でできるだけこつそりと、執^{しつ}念^{ねん}ぶかくジナイーダを見張^{みはり}つていた。彼^{かの}女^{じょ}に或^ある変^{へん}化^かが生^はじたことはもはや明^{めい}白^{はく}だった。彼女^{かのじょ}は一人で散^{さん}歩^ぽに出^でかけて、長^{なが}いこと歩^{ある}き回^{まわ}つていた。時^{とき}によると、客^{きやく}たちに顔^{かお}を見せずに、何^{なん}時間^{じかん}も自^じ分^{ぶん}の部^ぶ屋^やに引^ひつこもつていた。それまでは、ついでなかつたことである。わたしは突^{とつ}然^{ぜん}、ひどく目^めが見^みえだした。少^{すく}なくも、見^みえだしたような氣^きがした。

『あいつじゃないかしら？ それとも、いつそあいつかな？』

とわたしは、彼女^{かのじょ}の崇^{すう}拝^{はい}者^{しゃ}の一人^{ひとり}からまた一人^{ひとり}へ、せわしなく思^{おも}いを馳^はせながら、胸^{むね}の中で自^じ問^{もん}するのだつた。なかんずくマレーフスキイ伯^{はくしやく}爵^{しゃく}は、（もつとも、こんなことを認^めめるのは、ジナイーダのため心^{こころ}外^{がわ}の至^{いた}りだつたが）ほかの誰^{だれ}よりも危^き険^{けん}人^{にん}物^{ぶつ}のよう^{よう}に、ひそかにわたしは思^{おも}つていた。

わたしの炯眼^{けいがん}は、残念ながら自分の鼻の先までしか届かず、また折角のわたしの密計も、誰ひとり瞞^{だま}しおおせることはできなかったらしい。少なくともドクトル・ルーシンは、じきにわたしの腹を見抜^{みぬ}いた。とはいえ彼^{かれ}だって、近頃^{ちかごろ}は様子が変わって、めつきり痩^やせもしたし、相変らず笑い上戸^{じょうこ}ではあったものの、その笑い声は妙^{みょう}に鈍^{にぶ}く、毒^{ふく}を含んで、短くなつたし、平生の軽い皮肉や、とつてつけたような冷笑^{れいしょう}癖^{へき}は、我にもない神経質ないらだちに変つていた。

「ねえ君、なんだってそうしょつちゆう、ここへやつて来るんです」と彼は、ある日ザセーキン家の客間で二人きりになつた時、わたしに言つた。（令嬢^{れいじょう}はまだ散歩から歸つて来^こなかつたし、夫人のがみがみ声が中二階でしていた。小間使^{けんか}と喧嘩^{けんか}していたのだ）――「若^{わか}いうちにせつせと勉強^{べんきやう}しとかにやなんのに、どうしたことですか？」

「僕^{ぼく}が家で勉強^{べんきやう}してるかどうか、あなたにはわからないでしょう」とわたしは、いささか高飛車^{たかびしや}に言い返したが、たじたじの気味もないことはなかつた。

「何が勉強なものですか？ そんなこと、君の頭にありはしませんよ。だがまあ、これ以上何も言いますまい……君の年頃では、まあ無理もないからな。ただし君の見当は、大いに狂^{くる}っているですよ。この家がどういう家か、それが君には見えんですか？」

「なんのことだか、わかりませんね」と、わたしは空とぼけた。

「わからないって？ そりやますますいかん。僕は義務として、一言君に注意します。我々甲羅こうらをへた独身ものは、ここへ来ても、さしつかえない。なんのことがあるものですか？ 我々は鍛錬たんれんができてからびくともしないです。ところが君は、まだ皮膚ひふが弱い。ここの空気は、君には毒ですよ——ほんとですとも、うっかりすると伝染でんせんしますぞ？」
「どうしてです？」

「どうもこうもあったものですか。いったい君は、いま健康ですか？ 果してノーマルな状態にありますか？ 君がいま感じていることは、君のためになりますか、いいことですか？」

「でも、僕が何を感じてるというんです？」と、わたしは言ったが、心の中では、なるほど医者いしやの言う通りだと思った。

「いやいや、君は若い、まだ若い」と医者は、さもこの二つの言葉の中に、わたしに対する何かひどく侮蔑ぶべつぎ的な感じが籠こめてありでもするような、そんな言いぶりで言葉を続けた。——「ごまかそうたつて駄目だめですよ。だってまだまだ、君の心にあることは、ちゃんと顔に出ているもの、ありがたいことにね。だがしかし、こんな話をしたって始まらない。

第一この僕にしたって、こんな所へ来るはずはないですよ、もしも……（医者は齒をくいしばった）……もしも、僕がこんな唐変木でなかったらね。ただ一つ、僕が不思議でならんのは、君のような頭のいい人が、自分のすぐそばで起っていることに、どうして気がつかないんだろうな？」

「でも、何が起っているんです」と、わたしは素早く相手を受けて、すっかり緊張した。

医者は、妙に嘲るような同情の色を浮かべて、わたしをじろりと見た。

「なるほど、僕も大したものだ」と彼は、ひとり言のように言った。——「頗るもって、

この人の耳に入れとく必要のあることだて。……まあ要するに」と、そこで声を高めて、

「もう一遍言いますが、ここの雰囲気は君にはよくない。君はここで、いい気持になっているが、油断大敵ですぞ！ そりや温室のなかだって、やはりいい匂いはするが、そこで暮すわけにはゆかんですからね。ねえ！ 悪いことは言わないから、またあのカイダーノフ先生に戻りたまえ」

公爵夫人が入って来て、齒が痛いと言者にこぼしだした。やがてジナイーダが現われた。「そうそう」と、夫人は言い足した。——「ねえドクトル、この子を叱ってやって下さい

な。一日じゆう、氷水ばかり飲んでいるんですよ。それが、体にいいことでしょかねえ、胸が弱いくせに」

「なぜ、そんなことをなさるんです？」と、ルーシンが訊いた。

「やったら、どうなるとおっしゃるの？」

「なんですって？ 風邪を引いて、死ぬかもしれませんよ」

「ほんと？ まさか？ でも、かまやしない——それが当然だわ！」

「おやおや！」と、医者はうなつた。夫人は出て行つた。

「おやおや」と、ジナイーダは口真似をして、「生きることが、そんなに面白いかしら？ ぐるりを見回して御覧なさい。……どう、よくつて？ それともあなたは、わたしがそれさえわからない、感の鈍い女だと思つてらっしゃるの？ わたしは、氷水を飲むといい気持なの。だのにあなたはこんな人生が、束の間の満足のために危険を冒してはならないほど大事なものと、真顔でわたしに説教なさるおつもりね。——わたし、もう幸福なんかどうでもいいの」

「つまり、その」と、ルーシンが皮肉つた。——「気まぐれと自分勝手。……この二語にあなたは尽きるんですな。あなたという人は、全部この二語のうちにありますよ」

ジナイーダは、神経質に笑い出した。

「証文の出しおくれよ、ドクトル先生。案外、目が利きかないのねえ。だいぶ手おくれだわ。眼鏡でも、おかけになつたら？ わたし今、気まぐれどころじゃないの。あなた方をからかったり、自分を笑いものにしたり……そんなこと、何が面白いのですか！ 自分勝手だとおっしゃるけれど……ね、ヴォルデマールさん」と、そこで突然ジナイーダは方角を変えて、小さな足をトンと鳴らした。——「そんな憂鬱ゆううつな顔をしないでよ。わたし、人に同情されることなんか大嫌だいきらい」

彼女は足早に出て行つた。

「君には毒だ。全く毒だよ、ここの空気は、ねえ君」と、またルーシンはわたしに言った。

十一

その晩、ザセーキン家には常連が集まつた。わたしもその中にいた。

話がマイダーノフの例の詩のことになると、ジナイーダはしんからそれを褒めちぎつた。
「でも、よくつて？」と、彼女かのじょはマイダーノフに言った。——「もし、わたしが詩人だ

つたら、もつとほかのテーマでゆくわ。こんなこと、馬鹿げた話かもしれないけれど、でもわたし時々、妙な考えが頭に浮ぶのよ。ことに夜明け方、空がバラ色や灰色になつてくる頃、眠れずにいるような時にね。わたしなら、そうねえ……。こんなこと言つて、あなた方笑わないこと？」

「いいや、とんでもない！」と、わたしたちは異口同音に叫んだ。

「わたしならね」と彼女は、両手を胸に組んで、眼をわきの方へそそぎながら、言葉を続けた。――「若い娘が大勢、夜中に、大きな舟に乗つて――静かな河に浮んでいてころ、それを書くわ。月が冴えている。そして娘たちは、みんな白い着物を着て、白い花の冠をかぶつて、歌っているの。そうね、何か聖歌のようなものを」

「わかります、わかります。それから？」と、思わせぶりの空想的な調子で、マイダーノフが言つた。

「すると不意に――岸の上に、ざわめきや、高笑いや、松明や、手太鼓があらわれるの。……それは、バツカスの巫女が群れをなして、歌つたり叫んだりして走ってくるのよ。まあ、この光景を写すのは、あなたにお任せするわ、詩人さん。……ただわたしの注文は、松明は真つ赤で、しかももうもうと煙をふいていること。それから、巫女たちの眼が、花

の冠の陰でキラキラ光つて、花の冠は黒っぽくしたいわ。虎の皮や、杯も、忘れないでちようだい。——それに金だわ、金をどつさりね」

「その金は、いったいどこに使うのです？」と、マイダーノフは、平べったい髪かみの毛けを後ろへ払いながら、鼻の穴をひろげて訊いた。

「どこにですって？ 肩かたにも、腕うでにも、足にも、どこもかしこもよ。古代の女は、くるぶしに金の輪をはめていたというじやありませんか。そこで巫女たちは舟の娘たちを呼ぶの。娘たちの歌ごえが、ぱったりやまる。——もう聖歌どころじやありませんものね。でも娘たちは、そのままじつと身じろぎもしないの。河の流れに押おされて、舟はだんだん岸へ寄つて来ます。すると突然一人の娘が、そつと立ち上がるのよ。……ここところは、よく描びようしや写しなければいけないわ。月の光を浴びて、その娘が静かに立ち上がるところや、ほかの友達がびつくりする有様をね。……で、その娘が舟ばたをまたぐと、巫女たちはワツとそれを取りかこんで、真つ暗な夜闇よやみの中へ、さらって行ってしまうの。……ここは、煙うすが渦を巻いて、何もかもごつちやになつてしまふところを書くのよ。聞えるのは、巫女たちのキャツキャツという声ばかり。そして、その娘の花の冠が、ぽつんと岸に残っているの」

ジナイーダは口をつぐんだ。（『ああ！彼女は恋に落ちたのだ』と、わたしはまた考えた）

「それだけですか？」と、マイダーノフが訊いた。

「それだけよ」と、彼女は答えた。

「それだと、大がかりな、叙事詩のテーマにはなりかねますな」と、さも勿体らしく彼は指摘した。——「しかし、叙情詩の材料として、あなたのイデーを頂くとしましょう」

「ロマンティックなものですか？」と、マレーフスキイが訊いた。

「もちろん、ロマンティックなものです。バイロン風のね」

「が、僕に言わせると、ユーゴーはバイロンよりもいいですね」と、若い伯爵は何気なく口ばしった。——「面白い点でも上です」

「ユーゴーは第一流の作家です」と、マイダーノフは答えた。——「で、僕の友人のトンコシエーエフも、自作のイスパニア物語『エル・トロバドル』のなかで……」

「ああ、それ、あの疑問符が逆立ちしている本なのね？」とジナイーダが遮った。

「そうです。イスパニアでは、ああ書くことになっているんですよ。そこで僕の言いかけたのは、トンコシエーエフが……」

「おやおや！　またあなた方の、古典主義だ浪漫主義だという議論が、始まるのね」と、
「またもやジナイーダは彼を遮った。――」

「それより、何かして遊ばない？……」

「罰金ばっきんごっこですか？」と、ルーシンが受けた。

「いやだわ、罰金ごっこは退屈たいくつよ。比べごっこがいいわ」（この遊びは、ジナイーダが自分で考え出したものだった。何か一つ物を決めておいて、みんなでそれに似た何か別のものを考える。いちばんうまい比較ひかくを考えついたものが、褒美ほうびをもらうのである）

彼女は窓へ歩み寄った。日は沈しずんだばかりだった。空には、はるか高く、細長い赤い雲が幾筋いくすじも浮んでいた。

「あの雲は何に似ていて？」と、ジナイーダは訊いて、わたしたちの答えを待たずに、自分で、

「わたし、あの雲は、クレオパトラがアントニーを迎えに行ったとき、その金塗きんぬりの船に張ひろってあつた緋色ひいろの帆ほに似ていると思うわ。ねえ、マイダーノフさん、あなたこの間、その話をして下すつたわね？」

わたしたちはみんな、『ハムレット』の中のポローニアスよろしく、いかにもあの雲は

その帆に似ている、これ以上うまい比較は誰にも見つかるまい、と決めてしまった。

「でもその時、アントニーは幾つだったのかしら？」と、ジナイーダが訊いた。

「そりや、きつと青年だったに違いないですよ」と、マレーフスキイが口を入れた。

「そう、若かったですな」と、自信たっぷりでマイダーノフが裏書きした。

「失礼ですが」と、ルーシンが大きな声を出した。——「もう四十を越していましたよ」

「四十を越して」とジナイーダは、すばやく一瞥を彼にくれて、鸚鵡返しに言った。

わたしは、まもなく家に帰った。

『彼女は恋に落ちた』と、我ともなく、わたしの唇はささやいた。……『だが、いったい誰に？』

十二

日がたつにつれて、ジナイーダは、いよいよますます奇妙な、えたいの知れない娘になつていった。ある日、わたしが彼女の部屋の部屋へ入って行くと、彼女は籐椅子にかけて、頭をぎゅつと、テーブルのとがった縁に押しつけていた。はつと彼女は身を起したが……

見れば顔じゆうべつたり、涙にぬれていた。

「まあ、あなただったの？」と、彼女は薄情な薄笑いを浮べて言った。――「こつちへいらつしやい」

わたしがそばへ行くと、彼女は片手をわたしの頭にのせて、いきなり髪の毛をつかむと、ぎりぎり捻じ回し始めた。

「痛い……」と、やがてわたしは音をあげた。

「おや！ 痛いって！ じゃ、わたしは痛くないの？ 痛くないって言うの？」と、彼女は鸚鵡返しに言った。

「あら！」彼女は、わたしの頭から、ほんの一ふさ、髪の毛をむしり取ったのに気がつく、いきなり大声をあげた。――「大変なことをしてしまったわ！ 許してね、ヴォルデマールさん！」

彼女は、むしり取った髪の毛を丁寧ていねいにそろえると、自分の指に巻きつけて、小っちゃな輪に編あんだ。

「わたし、あなたの髪の毛をロケットに入れて、いつも身につけているわね」そう言った彼女の眼には、相変らず涙が光っていた。――「それで少しは、あなたの気も慰なぐさむかし

れないわ。……じゃ、今日はこれでね」

わたしが家に帰ってみると、不愉快なことが待ち構えていた。母が父を相手に言い合いをしていたのである。母が何やらしきりに父をなじると、父の方は例の調子で、冷やかで慇懃な沈黙をまもっていたが、まもなく外へ出て行った。わたしには、母が何をまくし立てていたのか、聞えなかったし、それに、そんな心のゆとりもありはしなかった。ただ一つ覚えているのは、言い合いが済んだあとで母がわたしを居間へ呼びつけて、わたしがいざしげと公爵夫人のところに入りに出ることについて、大いに不満の意を表し、あれはどんな卑しいことかもしれない女だと、罵ったことである。わたしは母のそばへ寄って、身をかがめてその手にキスすると（これは会話を打ち切ろうと思う時の、わたしの常套手段だった）、そのまま自分の部屋へ戻った。

ジナイーダの涙で、わたしはすっかり動転してしまった。わたしは、いったいどう考えたらいいものか途方に暮れて、こつちが泣き出さんばかりだった。年こそ十六になつていたけれど、わたしはまだほんの赤ん坊だったのである。もうマレーフスキイのことなどは、念頭になかった。ただしベロヴゾーロフは、日増しにだんだん殺気だつていつて、この油断のならない伯爵を、まるで狼が羊をねらうような目つきで睨んでいたが、わたしときた

らもう、何事も、誰^{だれ}の事も、てんで考えなかった。わたしは、ただぼんやりと空想にふけて、人目のない寂^{さび}しい場所ばかり求めていた。とりわけ気に入ったのは、あの崩^{くず}れ落ちた温室だった。わたしはよく、その高い塀^{へい}へよじ登って、腰^{こし}を下ろし、いつまでもじつと坐^{すわ}っていた。その自分の姿が、いかにも不幸で孤独^{こどく}で侘^{わび}しげな一個の若者といった格^{かっこ}好^うなので、しまいには、我と我が身がいじらしくなってくるのだった。そして、そうした悲哀^{ひあい}に満ちた感覚が、なんとも言えず嬉^{うれ}しかったのだ。わたしはそれに夢^{むちゆう}中になつていたのだ！ ……

さて、ある日、わたしは塀の上に坐って、遥^{はる}かなたに眺^{なが}め入りながら、鐘^{かね}の響^{ひび}きに耳をすましていたが……その時不意に、何ものか、わたしの身をかすめて過ぎたものがあつた。そよ風かと思えば、そよ風でもない。さりとて、身震^{みふる}いでもなく、いわばそれは何かの息吹^{いぶ}きか、それとも誰かが近づいてくる気配とでも言うか、そんな感じであつた。……わたしは視線を落した。すぐ下の道を、軽^{かろ}やかな灰色がかつた服を着て、バラ色のパラソル^{かた}を肩^{かた}にして、急ぎ足でジナイーダが歩いていて。彼女はわたしに気がつく、立ち止つて、麦藁^{むぎわら}帽子の縁を押し上げ、ビロウドのような眼でわたしを見上げた。

「そんな高いところで、何をしてるの？」彼女はなんだか異様な微笑^{びしょう}を浮^うべて訊^きいた。

「そうそう」と、すぐまた言葉が続けて、「あなたはいつも、わたしを愛しているとおっしゃるわね。——そんならここまで、この道まで、飛び下りてごらんさい。もし、本当にわたしを愛しているのなら」

ジナイーダが、終りまで言い切らぬうちに、わたしは後ろから誰かに小突かれてもしたように、早くも下へ身をおどらしていた。塀の高さは三、四メートルほどであった。わたしは両足が地面に届いた拍子に、はずみがあんまり強すぎたので、体を支えきれなかった。わたしはどきりと倒れて、一瞬間、気が遠くなった。やがて我に返ったわたしは、眼をあけないのに、すぐそばにジナイーダのいることがわかった。

「可愛いわたしの坊や」と彼女は、わたしの上にかがみ込みながら言っていた。その声には千々に乱れた情愛の響きがあった。——「どうしてあんたは、こんなことができたの、どうしてわたしの言うことなんか、きく気になったの。……わたしだって、こんなに愛してるのに。……さ、お起き」

彼女の胸は、わたしの胸のすぐそばで息づき、その両手は、わたしの頭を撫でていた。すると、突然——その時なんということが、わたしの身に起ったのだろう！ 彼女の柔らかなすがすがしい唇が、わたしの顔じゅうを、キスでおおい始めたのだ。……やがては、

わたしの唇にも触れたのだ。……だが、そこでジナイーダは、わたしの顔の表情からして、相変らず眼を上げずにはいるものの、もうわたしが意識を取戻したことを察したものと見えて、素早く身を起すと、こう言い放った。――

「さ、起きるのよ、向う見ずなお茶目さん。こんな埃の中に、いつまで寝ているつもり？」
わたしは起き上がった。

「パラソルを取ってちょうだい」と、ジナイーダは言つて、――「まあわたし、あんな所へ放り出してしまったわ。だめ、そんなにわたしの顔を見ちゃ。……なんてお馬鹿さんなの、あなたは？　どこか怪我しなかったこと？　イラクサに刺されて、ちくちくしやしなくつて？　そう言っているのよ、わたしの顔を見ちゃいけないって。……まあ、この人つたら、なんにもわからないんだわ、返事ひとつしやしない」と彼女は、ひとり言のように言い添えた。――「早くうちへお帰りなさい。ヴォルデマールさん。そして、奇麗にしない。わたしのあとから、のこのこついて来たりしたら、承知しないわよ。そんなことをしたら、もう二度と再び……」

彼女は、終りまで言いきらずに、さっさと向うへ行つてしまい、わたしは道に坐りこんだ。……足がいうことをきかないのだ。イラクサに刺された手がひりついて、背中はずき

ずきするし、頭はくらくらしていた。でも、その時わたしが味わったような至福の感じは、わたしの生涯しょうがいにもはや二度と再び繰返くりかえされなかった。それは甘美かんびな苦痛をなして、わたしの五体に宿っていたが、やがて法悦ほうえつはついに堰せきを切つて、わたしは踊り上おどがった、わめき立てたりした。全く、わたしはまだほんの赤ん坊だったのだ。

十三

その日は一日いちんちじゆう、わたしは堪たまらないほど浮うき浮うきと誇ほこらかな気持だった。のみならず、ジナイーダのキスの感かん触しよくも、顔一面にありありと残っていたので、わたしは興奮みぶるに身震いしながら彼女の言葉を一つ一つ思い浮べたり、自分の思いがけない幸福を、胸の底で愛めでいつくしんだりしていた。それで、現にそうした新しい感覚の源をなした当の彼女かのじよに会うのが、むしろ怖おそろしくなつて、できることなら会いたくない、と思つたほどであった。もうこの上、何ひとつ運命から求めてはいけけない、今こそ『思いつきり、心ゆくまで最後の息をついて、そのまま死んでしまえばいいのだ』と、そんな気持がした。

そのむくいは、てきめんで、あくる日わたしは傍屋はなれへ出かける道々、ひどい当惑とうわくを感じ

じた。それは、自分こそ秘密を守れますぞと、他人に見せつけたがっている人間に通用の、控え目な磊落の仮面などでは、とても匿しおおせるものではなかった。ジナイーダはいささかの心の乱れも見せず、すこぶる無造作にわたしを迎えたが、ただ指を一本立てて脅かす真似をして、どこか青あざはできなかったかと訊いた。わたしの折角の控え目な磊落さも、もののしい態度も、その瞬間に消しとんでしまったばかりか、それと一緒に、うじうじした当惑の感じもなくなつた。勿論わたしは、何も特別なことを期待していたわけではないが、とにかくジナイーダの落着きはらつた態度にぶつかつて、まるで頭から冷水を浴びせかけられたような体たらくだった。自分は、この人の目から見ればほんの赤ん坊なのだ——と、わたしはしみじみ思い知つて、ひどく辛い氣持がしてきたのだ！

ジナイーダは部屋のなかを行ったり来たりしていたが、わたしの顔を見るたびごとに、素早い微笑を浮べてみせた。とはいえ、彼女の思いがどこか遠くにあることは、わたしにはありありと見て取られた。……

『いつそ、自分の方から、昨日の話を持ち出してみようか』と、わたしは考えた。——

『あんなに急いで、いったいどこへ行つたのか、それを訊いて、すっかり泥を吐かせてしまおうか。……』とは思つたものの、わたしはただ片手を振っただけで、隅の方に腰を下

ろした。

ベロヴゾーロフが入って来た。彼が来たので、わたしは嬉しかった。

「実は、あなたの御用に立つようなおとなしい馬が、まだ見つかりませんでね」と彼は、つつけんどんな声で言った。——「フライタークのやつが、きつと一頭だけ受けあつたと言うのですが、どうも信用できません。危ないものですよ」

「なぜ危ないなんて、お思いになるの」と、ジナイーダは訊いた。——「伺いたいもんだわ」

「なぜですって？　だつてあなたは、馬の心得がないじゃないですか。ひよつとして、どんなことがもちあがるか、わかりませんからねえ！　だがそれにしても、急に馬に乗ろうなんて、えらい気まぐれを起されたものですねえ」

「ふふ、それはわたしの勝手よ、親愛なる猛獣さん。そんなわけでしたら、わたし、

ピョートル・ヴァシーリエヴィチにお願いするわ。……」（わたしの父は、ピョートル・

ヴァシーリエヴィチという名だった。わたしは、彼女が父の名をさも気軽に、楽々と口にするのにびっくりした。まるで父ならば、いつでも彼女の御用命に応ずるように、響いたからである）

「おやおや」と、ベロヴゾーロフがやり返した。——「あなたは、あの人と一緒に遠乗りなさるおつもりでしたか」

「あのひとだろうと、ほかのひとだろうと、あなたの知ったことじゃなくてよ。ただ、あなたではないことは、はっきりしているわ」

「僕^{ぼく}ではない」と、ベロヴゾーロフは鸚鵡^{おうむがえ}返しに——「どうぞ御^ご随^{ずい}意^いに。まあいいです。とにかく馬は、手に入れて差上げますよ」

「でも、よくって、牛みたいなのろくさしたのだったら、願^{ねが}い下げよ。よく申上げときますけど、わたしはギャロップで飛ばしたいのよ」

「ギャロップも結構でしょう。……でもそれは、マレーフスキイですか？ え、誰^{だれ}となんですか？」

「おや、あのひとじゃいけなくて、軍人さん？ まあ安心してちょうだい」と、彼女は言い添^そえた。——「あんまり目に角^{かど}を立てないでね。あなたとも一緒に行くつもりよ。あなただって知ってるでしょう、——マレーフスキイなんて、今じゃわたしにや、ぴ、ぴーだわ！」そう言^いって、彼女はかぶりを振った。

「そんなことをおっしゃるのは、僕の気休めのためですね」と、ベロヴゾーロフはふてく

さった。

ジナイーダは眼を細めた。

「そんなことが気休めになるの？　おやまあ、あきれた軍人さんだこと！」と、彼女はやがての果てに、ほかの言葉が見当らないような調子で、そう言った。――「で、ヴォルデマールさん、あなた、わたしたちと一緒にいらつしやる？」

「僕は苦手なんです……大勢おおぜいの人前へ出るのは……」とわたしは、眼を上げずにつぶやいた。

「あなたは、差向テータ・テートいの方がいいのね？……いいわ。自由な者には自由を、救われた者には……天国を与えよだわ」と彼女は、ほつと溜息ためいきをついて言った。――「よくつて、ペロヴゾーロフさん、一肌脱ひとはだぬいでちようだいね。わたし馬は、明日要いるんですから」

「でもね、お金はどこから入るの？」と、公爵夫人こうしゃくふじんが、口を入れた。

ジナイーダは眉まゆをしかめた。

「お母様に出して頂こうとは言やしないわ。ペロヴゾーロフさんが一時立たて替かえて下さるわよ」

「立て替えて下さる、立て替えて……」と、公爵夫人はぼそぼそ言ったが、突然とつぜん、声を

限りにわめき立てた。――「ドウニヤーシカや！」

「ママ、呼^{よびり}鈴^{りん}があげてあるじやないの」と、令^{れい}嬢^{じやう}が注意した。

「ドウニヤーシカや！」と、老夫人はまたどなった。

ベロヴゾーロフは別れを告げた。わたしも一緒に帰った。ジナイーダは、わたしを引留めなかった。

十四

あくる朝、わたしは早く起きて、庭の木で杖^{つえ}を一本作ると、城門の外へ出て行つた。ちよつと散歩をして、うさ晴らしをしてやれ、と思つたのである。からりと晴れた日で、日ざしは明るかつたが、暑いほどではなかつた。快いさわやかな風が、地上をさまよつて、あらゆるものをそよがせながら、しかもざわつかせるほどではなく、適度にさやさやと戯^{たわむ}れていた。わたしは長いこと、山や森を歩き回つた。わたしは自分を、幸福だと思つていたわけではない。現に家を出た時も、思うさま憂^{ゆう}愁^{しゆう}にひたりに行くつもりだったのである。――ところがやがて、青春や、ほがらかな天気や、さわやかな空気や、さつさと歩

く快さや、茂^{しげ}った草の上にひとり身を横たえる酔^よい心地^{ごこち}や——そうしたもののの方が勝ちを占めてしまった。あの忘れられぬ言葉のふしぶしや、あのキスの雨の思い出が、またもやわたしの胸にこみあげて来た。とにかくジナイーダは、わたしの思い切った勇^{ゆう}敢^{かん}な振舞^{ふるま}いを正^{ただ}当^たに認めずにはいられないのだ——と、そう思うと愉快^{ゆかい}だった。……

『あの人の目には、ほかのやつらの方が、立派に見えるのだ』と、わたしは考えた。――

『なあに、かまうもんか！ その代り、やつらはただ、やりますと言うだけだが、僕は、見事やつてのけたんだからな！ それにあの人のためなら、まだまだどえらいことをやって見せられるんだからな』

いろんな空想が、働き始めた。わたしは、自分が彼^{かの}女^{じょ}を敵^{てき}の手中から救い出す有^{あり}様^{さま}や、血まみれになった自分が彼女を牢屋^{ろうや}から奪^{うば}い出す光景や、そしてとうとう彼女の足もとで死ぬ場面を、次々に心に描^{えが}き出した。わたしは、うちの客間にかかっている絵を思い出した。それは、マレク・アデルがマテイルダを奪い去るところだったが、——ちようどその途端^{とたん}に、まだらな大きなキツツキが現われて、ほっそりした白^{しろ}樺^{かば}の幹をせかせかと登り始めたので、すっかりそのほうに気を取られてしまった。キツツキが幹^かの陰^{かげ}から、心配^{しんぱ}そうな顔を右に左にのぞかせる格好^{かっこう}は、コントラバスの首の陰から楽師が首をのぞか

せる様子にそっくりだった。

それからわたしは、『白き雪にはあらねども』を歌い出したが、それがやがて、その頃（ころ）はやっていた『そよ風ふけば、われ君を待つ』という歌謡（かよう）にかわり、しばらくするとわたしは大声で、ホミヤコーフの悲劇のなかの、星に呼びかけるエルマークの言葉を朗読（ろうどく）した。そうかと思うとまた、多情多感な一編の詩を作ろうと野心を起して、全編の結句になるべき一行をさえ思いついた。それは、『おお、ジナイーダ！ ジナイーダ！』という句だったが、結局ものにならなかった。

そうこうするうちに、そろそろ昼飯の時刻になった。わたしは谷間へ下りて行つた。細い砂の小道が、谷間をうねって、町へみちびいていた。わたしは、その小道を歩き出した。……ふと、何（なん）匹（びき）か馬の蹄（ひづめ）の音が、後ろから鈍（にぶ）く響（ひび）いてきた。わたしは振返ると、思わず立ち止（とど）まって、ひさしのついた帽子（ぼうし）をぬいだ。父とジナイーダの姿を、みとめたからである。二人（ふたり）は並（なら）んで馬を歩（あ）ませていた。父は何やらしきりに彼女に話（わ）しかけながら、胴（どう）体（たい）をすつきり彼女の方（かた）へ傾（かたむ）け、片手を馬の首についていた。父は微笑（びしょう）を浮（う）べていた。ジナイーダは、きつと眼（め）を伏（ふ）せ、唇（くちびる）を噛（か）みしめて、黙（だま）って父の言葉に耳を傾けていた。わたしがまづ目にしたのは、この二人だけだったが、やがてすぐその後を追って、谷の曲り角から、

ペロヴゾーロフの姿がぬつと現われた。外套がいとうのついた軽騎兵けいきへいの軍服を着て、泡あわをふいた黒馬に乗っている。駿馬しゅんめは首を振り振り、鼻息を立てて、踊りおどはねている。乗り手は、手綱たづなを引いたり、拍車はくしゃを当てたり、大騒おおさわぎだ。わたしは、わきへよけた。父は手綱を引いて、ジナイーダから身を離はなし、彼女は静かに父を見上げた。——そのまま二人は、駆け去ってしまった。……ペロヴゾーロフは、サーベルをがちやつかせて、まっしぐらにそのあとを追った。

『あいつ、蝦えびみたいに赤くなってる』と、わたしは心に思った。——『それにひきかえ、なぜ彼女はあんなに青いんだろう？ 朝いっぱい馬を乗りまわしたくせに——青い顔をしているとは？』

わたしは歩みを二倍ほども早めて、やっと昼飯のまにあった。父はもう服を改め、顔を洗ったあとのさっぱりした気色きしよくで、母の肘掛椅子ひしかけいすのそばに腰こしを下ろして、持ち前のなだらかな響きのいい声で、『討論新聞ジユルナル・デ・デバ』の雑録欄ざつろくらんを読よんでやっていた。母の方は、あまり身を入れずに聞いていて、わたしの姿を見ると、一日いちんちどこへ雲隠くもかくれしていたのかと尋ねた。かてて加えて、どこの馬の骨だか知れないような相手と、わけのわからない場所をうろつくのは、だい嫌いきらいだよと言いい足した。でも僕は、一人で散歩していたのです

よ——と、わたしは答えようとしたが、ふと父の顔をうかがうと、なぜか黙ってしまった。

十五

それから五、六日というものの、わたしはほとんどジナイーダに会わなかった。彼女^{かのじよ}は、体のぐあいが悪いと言っていたが、それでも傍屋^{はなれ}の常連が入れ代り立ち代り、彼ら^{かれ}のいわゆる『当直』にやってくるのは、一向さしかえなかった。ただ一人例外はマイダーノフで、彼は感激^{かんげき}する機会がなくなると、たちまち氣落ちがして、悄氣返^{しよげかえ}ってしまった。ペロヴゾーロフは、軍服のボタンをきちんとかけて、真つ赤な顔をして、不機嫌^{ふきげん}に隅^{すみ}の方に坐^{すわ}っていた。マレーフスキイ伯^{はくしやく}爵^{きやく}の華奢^{きやしや}な顔には、なんだか不氣味な微笑^{びしやう}が、絶えず漂^{ただよ}っていた。彼は今や、まさしくジナイーダの寵愛^{ちやうあい}を失ったので、老夫人に取入ろうと格別の勉励^{べんれい}ぶりを示し、貸馬車で夫人のお供^{とも}をして、総督^{そうとく}の所へ出かけさせた。もつとも、この遠征^{えんせい}は失敗に終ったのみならず、マレーフスキイは厭^{いや}な目にまであわされた。総督は逆手^{さかて}をとって、彼がいつぞや土木局の連中を相手にもちあげたさる醜聞^{ゆうぶん}を、わざわざ言い出したので、彼は弁明これ努めて、何分^{なにぶん}にもあの頃^{ころ}はまだ未經

験だったの——と、かぶとを脱^ぬがざるを得なかった。

ルーシンは、日に二度ぐらいやつて来たけれど、長居はしなかった。わたしは、この間の言い合い以来、この男がいささか煙^{けむ}たくなつたと同時に、しん底から彼に惹^ひきつけられるような気持もしていた。彼はある日、わたしと一緒に^{いっしょ}にネスクーチヌイ公園へ散歩に出かけたが、その時はひどく親切で愛想がよく、いろんな草や花の名前や特性を教えてくださいたりしていたが、やがて突然^{とつぜん}、それこそ藪^{やぶ}から棒に——額をぴしやりと叩^{たた}いて、こう叫^{さけ}んだ。

「ああ、俺^{おれ}は馬鹿^{ばか}だよ。あの人のことを、ただのコケツトだと思ってたのだからなあ？ どうやらこの世の中には、自分を犠^ぎ牲^{せい}にすることが楽しいような連中も、あるものと見えるなあ」

「それは、なんのことですか」と、わたしは訊^きき返した。

「いや、君には何も話したくないですよ」と、吐^はき出すようにルーシンは答えた。

ジナイーダは、わたしを避^さけていた。わたしの顔が見えると——これはわたし自身、いやでも気づかざるを得なかったのだが——彼女は厭な気持がするらしかった。彼女は無意識に、わたしから顔をそむけた……無意識にである。それがわたしには実に辛^{つら}く、身を切

られるような思いだった！　しかし、どうにも仕方がないので、わたしはなるべく彼女の目に触れないようにして、ただ遠くから彼女を見張っていることにしたが、これまた、いつもうまくゆくとは限らなかつた。彼女には相も変らず、何やら不可解なことが起りつつあつた。すっかり面^{おも}変りがして、何から何まで、まるで別人のようになってしまった。

なかでも、彼女に生じた変化が格別わたしの胸を打ったのは、ある暖かい、静かな日暮れのことであつた。わたしは、枝^{えだ}をひろげた一叢^{ひとむら}のニワトコの陰^{かげ}の、低いベンチに腰掛^{こしか}けていた。わたしは、この場所が好きだつた。ジナイーダの部屋の窓が、そこから見えただからである。わたしが坐^{すわ}っていると、頭の上の、すっかり暗くなった茂^{しげ}みの中で、小鳥が一羽^{いちわ}しきりにかきこせいわせていた。灰色の小猫^{こねこ}が、背中をまっすぐ伸ばして、そつと庭^{しん}へ忍^{しの}び込んだ。すでに明るくはないけれど、まだ透^すいて見える空氣のなかを、先陣^{せんじん}の力^{ちから}ブト虫たちが、重々^{うな}しい唸^{うな}りを立てて飛んでいた。わたしは坐ったまま窓^なを眺^{なが}め、いつか開きはしまいかと待ち受けていた。果して、窓は開いて、ジナイーダが姿を見せた。白い服を着ていたが、彼女自身も、顔から肩^{かた}、そして両手まで、真っ白なほど青ざめていた。彼女は長いこと、身じろぎもせず、ひそめた眉^{まゆ}の下から、じつとまっすぐ前を、いつまでも見つめていた。そんな目つきをする彼女を、わたしはついぞ見たこともなかつた。や

がて彼女は、両手をかたくかたく握りしめ、それをまず唇へ、それから額へ持つていったが——そこで、突然ぱつと指をひろげると、両の耳から髪かみの毛はらを払いのけ、さつと一振りひとふ髪を振上げたかと思うと、何か決心がついたといったふうに、頭を上から下へ大きくうなずかせ、ぱたんと窓を閉めた。

三日ほどしてから、わたしは庭で彼女に出会った。わたしがわきへ避けようすると、彼女の方で引止めた。

「手を貸してちょうだい」と、彼女は、以前の情愛のこもった調子で言った。——「わたしたち、長いことおしゃべりをしなかったことね」

わたしは彼女の顔をうかがった。その眼は静かに光って、顔は、まるで霽もやをとおして見るように、ほほ笑えんでいた。

「まだずっと、お加減が悪いのですか」と、わたしは尋たずねた。

「いいえ、もうすつかりいいの」と彼女は答えて、小さな紅あかいバラを一輪摘み取った。——「すこし疲つかれているけれど、これもじきに直るわ」

「で、また元通りのあなたになって下さるんですね？」と、わたしは訊いた。

ジナイーダは、バラを顔へ近づけた。すると、あざやかな花びらの照返しが、彼女の頬ほお

を染めたように思われた。

「ほんとに、わたし変ったかしら？」と、彼女は訊き返した。

「ええ、変りました」と、わたしは小声で答えた。

「わたし、あなたに冷たくしたわ——それは自分でもわかってるの」と、ジナイーダは言い始めた。——「けれど、あなたがそれを気にすることなんか、なかったのよ。……わたし、外に仕方がなかったんだもの。……でも、こんな話をして始まらないわ！」

「あなたは、僕があなたを愛するのが厭なんです——それなんです！」と、わたしは思わずカツとなって、陰気な調子で叫んだ。

「いいえ、愛してちょうだい。けれど、前のようにはなしにね」

「というと？」

「お友達になりましょうね——それがいいのよ！」ジナイーダは、わたしにバラの花を嗅がせて、——「ね、よくって、わたしあなたよりずっと年上なんだから——叔母さんにだつてなれるはずよ、ほんとに。また、叔母さんでないまでも、姉さんになら立派になれるわ。そこであなたは……」

「僕は、どうせ赤ん坊ですよ」と、わたしは遮った。

「ええ、そう、赤ちゃんね。けれど、可愛らしい、おとなしい、利口な子だから、わたし大好きなのよ。ああ、そうそう、こうしたらいいわ。わたし、今日からあなたを、わたしのお小姓こしょうに取立ててあげるわ。そこで、お小姓というものは、御主人ごしゅじんのそばを離れてはなはいけないということを、忘れてはいけませんよ。さ、これが、あなたの新しい位のしるし」と、彼女は言い足して、わたしの短い上着のボタンに、バラの花を挿さしてくれた。――
――「わたしの御寵愛のしるしよ」

「僕は前には、もっと別の寵愛を受けていましたよ」と、わたしは口をどがらした。

「まあ!」と、ジナイーダは言つて、横合いからわたしの顔をちらりと見た。――「この人の覚えのいいこと! いいわ、今だつてかまやしないわ。……」

そう言つて、わたしの方へ身がかがめると、わたしの顔に、清らかな静かなキスを、一つしてくれた。

わたしはそういう彼女の顔を、ほんのちらりと見上げただけだが、彼女はくるりとそっぽを向いて、「あとからついて来るのよ、お小姓さん」と言い捨てると、さつさと傍屋はなれの方へ歩き出した。

わたしは、続いて歩き出したが、心の中で絶えず疑いまどつていた。『いったい』と、

わたしは考えるのだった、——『このしとやかな、思慮しりよぶかい娘むすめが、これまでわたしの知っていたあのジナイーダなのかしら？』思いなしか、彼女の歩きつきまでが、前よりも静かになったような気がした。その姿もおしなべて、一層立派になって、すらりとしてきたような気がした。……

そして、我ながらいじらしいことだが、わたしの胸の恋情れんじょうは、なんという新しい力をもつて、燃え立つたことだろう！

十六

夕食のあとで、また常連が傍屋はなれに集まって、令嬢れいじょうもその席へ出てきた。わたしにとって終生わすれがたいあの最初の晩のように、そこには全員が、一人も欠けずにそろっていた。ニルマーツキイまでが、のこのこやって来ていた。マイダーノフは、その晩イの一番にやって来たが、つまり新作の詩を持参およに及んだわけだった。またもや罰金ばっきんごっこが始まったけれど、もう以前のような突飛とつびな振舞ふるまいも、悪ふざけも、馬鹿騒ばかさわぎもなくて、——ジプシーめいた要素は消えうせていた。

ジナイーダが、わたしたちの一座を、新しい気分のものに切り替えたのだ。わたしは小姓しょうじょうの役目がら、彼女かのじょのそばに席を占めた。そうこうするうちに、やがて彼女は罰金に当った人が自分のみた夢ゆめの話をすることを提案したけれど、これはうまくゆかなかった。さっぱり面白くもない夢だつたり（たとえばペロヴゾーロフは、愛馬にフナを食わせたが、その馬の首が木になっていた——という夢を見た）、あるいは不自然な、わざとでつちあげた夢だつたりした。マイダーノフは、一編の小説をもつて、我々をもてなした。そこには、アーチ形の古めかしい墓穴ぼけつが出てきたり、豎琴たてことを抱いた天使が現われたり、物を言う花だの、はるかに漂ただよつてくる楽がくの音ねだの、たいした道具だてだった。ジナイーダは、終りまで話させなかった。

「一旦いったんもう、作り話になつたからには」と、彼女は言った。——「こんどはみんな、何か話することにしましょう。自分で考えた話でなくちや駄目だめよ」

さて、まず第一に話をする番にあたつたのは、またもペロヴゾーロフだった。

若い軽騎兵けいきへいは閉口して、

「僕は、話なんか考え出せませんよ！」と、わめいた。

「また、そんなつまらないことを！」と、ジナイーダは引取つて、——「じゃ、たとえば、

あなたがお嫁^{よめ}さんをもらったと考えてみるのよ。そこであなたが、お嫁さんと一^{いっしよ}緒にどんな風に暮^{くら}すか、それを話してみるといいわ。あなたなら、お嫁さんを閉じ込^こめてしまうでしょうね？」

「閉じ込めるです」

「で、ご自分も一緒にいるんでしょうね？」

「自分も、必ず一緒にいます」

「結構だわ。でももし、お嫁さんがそれに飽^あきて、あなたを裏切るようなことをしたら？」

「殺してしまうです」

「でも、お嫁さんが逃^にげだしたら？」

「追^{つか}かけて捕^{つか}まえて、やはり殺してしまうです」

「そう。でもね、かりにこのわたしが、あなたのお嫁さんだったとしたら、どうなすって？」

ベロヴゾーロフは、ちよつと絶句してから、

「そしたら、僕は自殺します……」

ジナイーダは笑い出した。

「どうもあなたの歌は、ぽつんと切れてしまうわねえ」

二番目の罰金は、ジナイーダに当った。彼女は、眼を天井へ上げて考え込んだ。

「じゃ、いいこと」と、彼女はやがて話し出した。――「私の考え出した話なのよ。……まず、立派な御殿を想像してちょうだい。夏の夜で、すばらしい舞踏会があるの。その舞踏会は、若い女王のお催しなのよ。どこもかしこも、金や、大理石や、水晶や、絹や、灯火や、ダイヤモンドや、花や、お香や、あらんかぎりの贅沢なもので、いっぱいなの」

「あなたは、贅沢がお好きですか？」と、ルーシンが遮った。

「贅沢って、奇麗ですものね」と、彼女は答えた。――「わたしなんでも奇麗なのが好き」

「立派なものよりもですか」と、彼が訊いた。

「なんだか、ひねくつた言いようね。よくわからないわ。まあ、邪魔しないでちょうだい。とにかく、すばらしい舞踏会なの。お客も大勢いて、それがみんな若くて、立派で、勇敢で、みんな夢中で女王様に恋しているの」

「客の中に、女性はいないのですか？」と、マレーフスキイが訊いた。

「いないの。でも、ちよつと待って――やっぱり、いるわ」

「みんな不器量なんですネ？」

「すばらしい美人ぞろい。でもね、男はみんな、女王に恋してるの。女王は背が高くて、すらりといい姿で、真つ黒な髪かみのうえに、小さな金きんの王冠おうかんを載のせているの」

わたしは、ジナイーダをちらと見た。と、その瞬しゅん間かん、彼女は我々みんなよりも、ずっと高貴な存在に思われ、その白い額からも、じっと動かない眉まゆからも、なんとも言えない明るい知恵ちえや威力いりよくが、匂におってくるような気がして、わたしは思わず、『あなたこそ、その女王だ！』と、心に叫さけんだほどだった。

「みんな、女王様のまわりに、ひしめき合つてね」と、ジナイーダは話を続けた。――

「あらん限りのお追つ従しやうを奉たてまつるの」

「ほう。女王様は、お追従しやうが好きなんですネ？」と、ルーシンが聞きとがめた。

「やりきれないわね、この人は！ まぜっ返してばかりいて。……お追従しやうの嫌きらいな人が、どこの世界にあつて？」

「もう一つだけ、最後に伺うかがいたのですが」と、マレーフスキイが口を出した。――「その女王には、夫があるのですか」

「わたし、そんなこと考えもしなかったわ。いいえ、夫なんて要いるもんですか」

「そうですとも」と、マレーフスキイは相槌^{あいづち}を打った。——「夫なんて、要るものですか」

「静かに《シランス》！」とフランス語のからつ下手^{べた}なマイダーノフが、フランス語で叫んだ。

「ありがとう《メルシ》」と、ジナイーダは彼^{かれ}に酬^{むく}いて、——「さて女王は、そんなお追従に耳をかしたり、音楽を聴^きいたりしているけれど、その実お客の誰^{だれ}一人にだって、目もくれないの。六つの大窓が、上から下まで、天井から床^{ゆか}まで、すっかりあけ放たれて、その外には、大きな星くずをちりばめた暗い夜空や、大きな木々の茂^{しげ}った暗い庭があります。女王は、その庭に見入っているの。そこには、木立^{こたち}のそばに噴^{ふん}水^{すい}があつて、闇^{やみ}の中でも白々と、長く長く、まるで幻^{まぼろし}のように見えています。女王の耳には、人声や音楽の合間々々に、静かな水音が聞えるのです。女王は、闇に見入りながら、こんなことを考えるの——皆^{みな}さん、あなた方はみんな、貴^{とうと}い生^{なま}れで、賢^{かしこ}くて、お金持です。あなた方は、わたしを取巻いて、わたしの一言一句を重んじて、わたしの足もとで死ぬ覚悟^{かくご}でいらつしやる。つまりわたしは、あなた方の生死を、わたしの手に握^{にぎ}っているわけです。……ところが、あの噴水のそばには、あのさわさわと鳴る水のそばには、わたしの愛する人、わたしの生

死をその手に握っている人が、たたずんで、わたしを待っているのよ。その人は、おごつた衣裳いしやうも着ていないし、宝石もつけてはいず、誰もその名を知る人はいません。けれど、その人はわたしを待ち受けているし、また、わたしがきつと行くものと信じきっています。——ええ、わたしは行きますとも。一旦わたしが、その人のところへ行つて、一緒になろうと思つたら最後、わたしを引留めるほどの力は、この世のどこにもありはしない。そこでわたしは、あの人と一緒に、あの庭の暗がりへ、木立のそよぐもとへ、噴水のさわさわ鳴る陰かげへ、姿を消してしまうの……とね」

ジナイーダは口をつぐんだ。

「それは作り話ですか」と、マレーフスキイが鎌かまをかけた。

ジナイーダは、見向きもしなかった。

「だが諸君、いったいどんなものでしょうな」と、出し抜けだぬにルーシンが言い出した。——「かりにもし、我々もそのお客さんの中にいて、しかもその噴水のほとりの仕合せ者のことを知っているとしたら、我々は果して、どうするだろうか」

「待つて、ちよつと待つて」と、ジナイーダが遮った。——「あなた方が一人々々どうなさるか、わたし自分で言ってみるわ。あなたはね、ペロヴゾーロフさん、その人に決闘けつとう

を申込むわね。マイダーノフさん、あなたは、その人に当てつけた諷刺詩ふうししを書くわ。……でも、そうじゃないわ——あなたは諷刺詩が書けないから、バルビエ風の短長格の長詩でも作って、その力作を『テレグラフ』誌に発表なさるわ。それから、ニルマーツキイさん、あなたはその人から、お金を借り出すわ……じゃない、あべこべにお金を貸して、利息を取るわね。ところで、あなたは、ドクトル……」彼女は言いよんだ。「そうねえ、あなたのことはわからないわ、どうなさるか」

「僕は侍医じいの役目として」と、ルーシンは答えた。——「その女王を諫めいさますな。お客どころでない非常時に、舞踏会なんか催さないようにね。……」

「なるほど、おつしやるとおりかもしれないわね。ところで伯爵はくしやく、あなたは？……」

「わたしは？」と、例の不気味な微笑びしょうを浮べて、マレーフスキイが鸚鵡返おうむがえしに言った。

「あなたなら、毒の入ったお菓子を、その人にすすめるわね」

マレーフスキイの顔は、かすかに引きつって、一瞬間ユダヤ人のような表情を帯びたが、すぐ高笑いにまぎらしてしまった。

「さてそこで、ヴォルデマールさん、あなたはどうかと言うと……」と、ジナイーダは続けたが、——「でも、もうたくさんだわ。何かほかのことをして遊びましょう」

「ヴォルデマール君は、お小姓の資格で、女王様が庭へ駆け出す時、その裳裾を捧持するでしょうな」と、毒々しい口調でマレーフスキイが一矢をむくいた。

わたしはカツとなつた。しかしジナイーダは、素早くわたしの肩に手を置くと、半ば身を起しながら、やや顫えを帯びた声で、こう言い放った。

「わたし、無礼な口をきく権利なんか、差上げた覚えはございません、伯爵。ですから、このまま御退席を願います」そう言つて、ドアをさして見せた。

「とんだことです。お嬢さん」と、マレーフスキイはつぶやいて、真つ青になつてしまつた。

「令嬢の言われるとおりだ」と、ベロヴゾーロフはわめいて、やはり立ち上がった。

「わたしは、誓つて言いますが、こんなこととは思ひもかけなかつたのです」と、マレーフスキイが続けた。——「わたしの言葉には、別にこれといったことも、ないようですし

……第一、お気を悪くさせようなどという考えは、毛頭なかつたのです。……許して下さい」

ジナイーダは、冷たい一瞥を彼に投げると、冷やかな薄笑いを漏らした。

「じゃ、いいわ、いらしても」と彼女は、無造作に手を一振りして言った。——「わたし

もヴォルデマールさんも、つまらない向^{むか}腹^{はら}を立てたものだわ。あなたは、皮肉を言うのが楽しみなのね……たんとおつしやるがいいわ」

「許して下さい」と、もう一遍^{いっぺん}マレーフスキイは繰^{くり}返^{かえ}した。

一方わたしは、今しがたのジナイーダの手の振りようを思い浮^{うか}べながら、本当の女王様でも、あれ以上の威厳^{いげん}をもつて、無礼者にドアをさして見せることはできまいと、改めてまた心に思った。

この小さな一幕のあつたあとは、罰金ごつこも長続きしなかった。みんないささか氣詰^{きづま}りになってきたが、それは当のその一幕のためというより、もっと別の、あまりはつきりしないが何かしら重苦しい、ある感情のためであつた。誰もそのことを口に出しこそこしなかつたけれど、みんなそれぞれ、自分の胸にも仲間の胸にも、そんな感情がわだかまつていることを意識していたのだ。やがて、マイダーノフが自作の詩を朗読すると、マレーフスキイは大げさな熱^{ねつきよう}狂^まぶりでもつて褒^ほめそやした。

「こんどは先生、善良に見られたがつてゐるんですね」と、ルーシンがわたしに耳打ちした。わたしたちは、まもなく散会した。ジナイーダは急に物思いに沈^{しず}んでしまうし、公爵夫人は頭痛がすると言いによこすし、ニルマーツキイはリユーマチが痛むと言い出す——と

いった始末だったからである。

わたしは、長いこと寝つかれなかった。ジナイーダのした話で、激しく心を打たれたのだ。

『ほんとにあの話には、何か暗示があるのだろうか？』と、わたしは自分に尋ねた。――『そしていったい誰を、そして何事を、彼女は仄めかそうとしたのだろうか？ それにしても、暗示すべき事がちゃんとあるとすれば……思い切って言い出すことが、できるものかしら？ いやいや、そんなはずはない』

わたしは、火照った頬を代る代る枕へ当て変えながら、そうささやいた。……とはいえずわたしは、さつきあの話をした時のジナイーダの顔の表情を思い出し……それから、ネスクーチヌイ公園でルーシンが思わず発したあの叫び声や、彼女のわたしに対する態度が急に変わったことまでも思い出して――すっかり訳がわからなくなるのだった。「その男は誰か？」これだけの言葉が、闇のなかにくつきりと印されて、わたしの眼の前に立っていた。まるでそれは、低い不吉な雲が頭上に垂れこめたみたいな気持で、わたしはその重圧をひしひしと感じながら、それが爆発する時を、今か今かと待ち構えていた。近頃になつてわたしは、いろんなことに慣れもしたし、ことにザセーキン家では、やっどこさいろん

なことを見せつけられた。彼らのふしだらさや、あぶら蠟燭ろうそくの燃えさし、欠けたナイフやフォーク、陰気いんきくさいヴォニファーチ、尾羽おはうち枯からした小間使たち、当の公爵夫人の立居振舞い——そんな奇怪きかい千萬な暮しぶりなんかには、もうビクともしなくなっていた。……だが、今ジナイーダの身に漠然ばくぜんと感じられる或あること、——それには何としても馴な染じむことができなかった。……「男たらし」と、わたしの母はいつぞや彼女のことを罵ののした。その「男たらし」である彼女が、わたしの偶像ぐうぞうであり、わたしの神とあがめる存在なのだ！ その悪罵あくばが、わたしの胸を焼き焦こがした。わたしはそれから逃のがれようと、枕に顔を埋うめた。わたしは無性むしょうに腹が立ったが、同時にまた、噴水のほとりのあの仕合せ者になれさえしたら、どんなことでも承知してみせるどんな犠牲ぎせいでも払はらってみせる、と思った。……

体じゅうの血が燃えたぎった。『庭……噴水……』と、わたしは思った。……『よし、ひとつ庭へ出てみよう』わたしは手早く服を着けて、家から抜け出した。

闇の夜で、木々はかすかにそよいでいた。空からは、静かな冷氣が下りてきて、野菜ばたけからは、茴香ういきようの香かおりが漂かってきた。わたしは、何本かの並木道なみきみちをすっかり歩いてしまった。自分の軽い足音が、わたしを当惑とうわくさせもすれば、励はげましてもくれた。わた

しは時々立ち止って、何ものかを待ち受けながら、自分の心臓が早鐘はやかねのように高鳴るのに耳をすました。やがての果てに、わたしは垣根かきねのそばへ行つて細い棒ぐいに寄りかかった。と不意に——あるいは、そら耳だったろうか——わたしからつい五、六歩のところを、さつと女の姿がひらめいて過ぎた。……わたしは、闇のなかへひたと眼をこらし、息をひそめた。これは何だろう？ 聞えたのは、誰かの足音だったろうか、——それとも自分の心臓の高鳴りだったろうか？ 「誰だ、そこにいるのは？」と、わたしは言ったが、舌がもつれて、ほとんど聞き取れない声だった。また何か物音がした。あれは何だろう？ 押し殺した笑い声か？……それとも、そよぐ木の葉か？……それとも、耳のすぐそばで漏もらされた溜息ためいきか？ わたしは、こわくなつた。……「誰だ、そこにいるのは？」と、わたしは声を低めて、また言った。

空気は、ほんの一瞬間、さつと流れた。空には、一筋、火のような筋がきらめいた。星が流れたのだ。

『ジナイーダ？』と、わたしは訊こうとしたが、音はわたしの唇で空しく消えた。そして突然とつぜん、あたりのものみな、深い沈黙ちんもくに沈んでしまった。真夜中にはよくあることである。……木陰のコオロギまでが鳴りをひそめて——ただどこかの窓が、かたりといっただ

けだった。わたしは、帰ろうとしては佇み^{たたず}、帰ろうとしては佇み^{たたず}していたが、やがて自分の部屋へ、自分の冷えはてた寢床^{ねどこ}へ帰った。わたしは、異常な興奮を感じていた。さながら逢引^{あいびき}に出かけて行つて、結局ひとりぼっちで、他人の幸福のそばを指をくわえて通つたような。

十七

そのあくる日、わたしはジナイーダを、ほんのちらりと見ただけだった。彼女^{かのじよ}は公爵夫人^{やくふじん}と一緒に辻馬車^{いっしょ つじばしや}に乗つて、どこかへ出かけるところであつた。そのかわりわたしは、ルーシンに会つた。もつとも彼は、ろくろくわたしに挨拶^{あいさつ}もしなかつたが。それからまた、マレーフスキイにも出会つた。若い伯爵^{はくしやく}は、にやにや作り笑いをしながら、さも親しげに話しかけた。傍屋^{はなれ}の常連の中で、どうしたわけかこの伯爵だけは、わたしの家にうまく取り入つて、母のお気に入りだったのである。もつとも父は、この伯爵を毛嫌い^{けきら}して、無礼なほどの丁重さであしらっていた。

「おや、お小姓君^{ぱうじゅ}」と、マレーフスキイは口を切つた。——「お目にかかれて、じつに嬉^{うれ}

しいです。あなたの美しい女王様は、何をしておられますか」

彼のすがすがしい秀麗な顔が、その瞬間わたしには、虫酸が走るほど厭だったし、おまけに彼が、人を馬鹿にしたようなふざけた眼つきで、じつとわたしを見ているので、こっちは返事もしてやらなかった。

「君はまだ、おこっているのですか」と、彼は続けた。——「つまらんことですよ。第一、君にお小姓という名をつけたのは、僕じゃないんだし、それにまたお小姓というものは、まずもって女王様の付き物ですからねえ。だがしかし、失礼ながら一言御注意しますが、どうも君は職務怠慢ですな」

「どうしてです？」

「お小姓というものは、女王様のそばを離れてはいけないのですよ。お小姓は、女王様の一挙一動をみんな知っているべきだし、いつそ女王様の見張りをさえ勤めるべきものなんですよ」そこで声を低めて、彼は言い添えた、——「昼も、夜もね」

「それは、どういう意味です？」

「どういう意味？　僕は、はっきり言っているはずですがね。昼も——夜も、ですよ。昼間はまあ、なんとかなるでしょう。日の目はあるし、人目もありますからね。ところが夜

というやつは、とかく災いわざわの起りがちなものでね。まあ悪いことは言わないから、夜ぐうぐう寝ねてないで、一生けんめい大きな眼をあけて、見張りをするんですね。ほら、覚えているでしょう——庭、夜なか、噴水ふんすいのほとり——そういう場所で待ち伏せぶせるんですね。いまに君は、僕にありがとうを言うでしょうよ」

マレーフスキイは高笑いをして、くるりとわたしに背を向けた。彼はおそらく、自分の言ったことを、特に重大とも思っていなかったろう。何しろ彼は、人をかつぐ名人として通っていたし、仮装舞踏会かそうぶとうかいなどで、まんまといっぱいくわせる妙技みょうぎを謳うたわれていたからである。これには、彼という人間全体にしみとおっている無意識な嘘うそつき癖くせが、あずかつて大いに力があつたのだ。……彼はただ、わたしをちよいとからかおうと思っただけのことだろうが、その一言一句は猛烈もうれつな毒となつて、わたしの血脈けつみやくという血脈を走り回った。血がどつとばかり、頭へ押しよせた。

『ああ！ そうだったのか！』と、わたしはひとりごちた。——『よし！ するとつまり、僕がなんとなく庭へ惹ひかされていたのも、やはり意味のないことじゃなかったのだ！ いやいや、そんなことがあるもんか！』と、わたしは大声でわめいて、握にぎりこぶしで胸をどんと叩たたいたが、そのくせ、何があつてはならないのかという点になると、自分でも見当

つかなかつたのである。

『マレーフスキイ御自身、庭へ出馬なさるわけかな』と、わたしは考えた。（彼がひよいと、口をすべらしたのかもしれない。そのくらいの鉄面皮さなら、ありあまつている彼のことだから）——『それとも、誰かほかのやつが現われるかな。（うちの庭の垣根は、とても低かつたから、乗り越えるにはなんの造作もなかった）——だがとにかく、僕に取つつかまつたやつは、百年目だぞ！ 誰にもせよ、僕にぶつからないように用心するがいい！ 僕は、僕だつて復讐する力があることを、世間のやつらにも、裏切り者のあの女にも（とわたしは、ずばりと彼女を裏切り者と呼んだ）——思いしらせてやるぞ！』

わたしは、自分の部屋へ戻ると、デスクの引出しから、この間買ったばかりの、イギリス製のナイフを取出して、その切れ味をためしてみた。それから眉の根を寄せて、一点に集中した冷やかな決意をもって、それをポケットに収めた。そんなことは、別に驚くほどのことはないし、またこれが最初でもない——といった調子であった。わたしの心臓は、毒々しくたけり立つて、石のようにコチコチになった。わたしは夜がふけるまで、眉をしかめたまま、唇をキツと噛みしめて、絶えず部屋の中を行きつ戻りつしながら、熱しきつたナイフをポケットのなかで握りしめ、何かしら凄じい出来事にたいする心構えを、あら

かじめ整えていた。この新しい、ついぞ味わったこともない感覚は、わたしを酔^よわせたばかりか、陽気にさえたので、肝^{かん}心^{じん}のジナイーダのことは、ほとんど考えに上らないほどだった。わたしの念頭には、絶えずこんな文句がちらついていた。

——アレーコ、若いジプシー。——「どこへ行く、この色男め？ そのまま寝ている……」それから、「まあ、あなた血だらけじゃないの！ ……なんてことをしたの？ ……

「なんにも、しやしない！」（訳注 プーシキンの叙事詩『流浪の民』より）

なんという残^{ざん}忍^{にん}な微笑^{びしょう}を浮^うべながら、わたしはこの『なんにも』という句を、繰^{くり}返^かしたことだろう！

父は家にいなかった。しかし、この間からほとんどしよつちゆう、内^{ない}攻^{こう}したいらだちの状態にいる母は、わたしのただ事でない様子に目をつけて、夜食の時、わたしにこう言った。

「何をお前、そうふくれ返っているんだね？ まるでネズミが、ひきわり麦をねらってるみたいにさ」

わたしは返事の代りに、ほんのお付合いににやりと笑ってみせて、『この気持を、親が知つたらなあ！』と考えた。十一時が打った。わたしは自分の部屋へ引きとつたが、服は

脱がずにいた。わたしは、真夜中を待つていた。やがて、十二時が打った。『さあ、潮時だ！』と、わたしは齒を食いしぼりながらささやいて、上着のボタンを上まで掛け、御丁寧に両の袖をたくし上げて、庭へ出かけて行つた。

わたしはあらかじめ、見張りの場所を決めていた。わたしたちの領分とザセーキン家の領分との地境を成している垣根が、共同の堀にぶつかっている庭のはずれに、縦の木が一本、ぽつんと立つていた。その低く茂つた枝の下に立つていれば、夜の闇がゆるす限りは、あたりで起ることの一切が、よく見えるのだった。そこには、一筋の小道がうねつていて、それがいつも、へんに神秘めてわたしには見えた。というのはその小道が、ちやうどその場所で人が乗り越えたらしい足跡の残っている垣根の下を、蛇のように這い抜けて、アカシアばかりでできている円い四阿へ、通じていたからである。わたしは縦の木へたどり着くと、その幹に寄りかかつて、見張りを始めた。

前の晩と同じく、静かな夜だった。しかし、空には雨雲が減つて、灌木の茂みの形のみならず、背の高い草花の影までが、一層はつきり浮んでいた。待ち構える身にとつて、最初の幾瞬間は辛かった。ほとんど恐ろしいくらいだった。覚悟はすっかりできていたけれど、さてどういふ行動に出たものか、それだけが心がかかりだった。『どこへ行くの

だ？ 止め！ 白状しないと、殺しちゃうぞ！』と、どなりつけてやろうか。それとも、ひと思いに斬りつけてやろうか。……ちよつと音がしても、枝や葉がカサリと鳴っても、さやいでも、それが一々わたしには何か意味ありげに、ただ事でないように聞えた。……だんだん覚悟ができてきた。……わたしは上体を前へ乗り出した。……ところが、半時間たち、一時間たつうちに、わたしの血潮はしだいに静まり、冷めていった。こんなことをしたつて無駄骨だ、我ながらいささか滑稽なくらいだ、これはてつきりマレーフスキイのやつがいっぱい食わたしたのだ——という意識が、じりじりと胸の中へ忍び込んで来た。わたしは待ち伏せの場所を離れて、庭をぐるり一回りしてみた。まるでわざとのように、ほんの葉ずれほどの音さえ、どこにもしなかった。何もかも、しんと静まり返つて、うちの犬までが、木戸のそばに丸くなって眠っていた。わたしは、温室の崩れ残りによじ登った。遠い野原が眼の前にひらけ、この間ジナイーダに出会った時のことが思い出されて、わたしは物思いに沈み始めた。……

わたしは、ぎくりとした。……どこかでギイと戸のあく音がして、それから小枝の折れる音が、かすかにしたような気がしたのだ。わたしは、ふた跳びで崩れ残りから跳びおりると、——その場に立ちすくんでしまった。すばやい、軽やかな、それでいて用心ぶかい

足音が、はつきりと庭の中に響ひびいていた。だんだんわたしの方へ近づいてくる。『さあ、来た。……いよいよやって来たぞ!』という考えが、わたしの心臓をかすめた。わたしは、引つったようにナイフをポケットから抜き出すと、ぐいとそれを開いた。——何か赤い火花のようなものが、眼のなかでくるくる回りだし、恐ろしさと憎にくさどで、頭の毛がもずもずうごめいた。……足音は、まっすぐわたしの方へ進んで来る。わたしは、そろそろ腰こしを落して、足音に向つて身構えた。……男の姿が現われた。……南無三なむさん! それはわたしの父だった。

わたしは咄とつぎ嗟に見分けがついた。父は全身すっぽり黒マントにくるまり、帽子ぼうしを目深まぶかにおろしていたが、それでは包み匿かくせなかつた。彼は爪先つまさき立ちで、そばを通り過ぎた。わたしには気がつかなかつた。わたしは、何に身をかくしていたわけでもないけれど、地面に這はいつくばらんばかりに小さく縮こまっていたのである。嫉妬しつとにかられて、人殺しの覚悟までしていたオセロは、突とつじよ如として小学生に化してしまった。……思いもかけぬ父の出現に、わたしはびつくり仰ぎようてん天のあまり、彼がどこからやって来て、どこへ姿を消したのか、初めは気がつかなかつたほどであつた。わたしがやっと身を伸のばして、『なんだつてお父さんは、よる夜中に庭なんぞ歩くんだらう』と考えたのは、再びあたりが、しん

と静まり返った時であつた。恐ろしさのあまり、わたしはナイフを草むらに落してしまつたが、それを捜すどころではなかつた。恥ずかしくてならなかつたのだ。

わたしは一遍に酔いがさめた。とはいえ、家へ戻る途中で、わたしはやはり、ニワトコの陰の例のベンチのそばへ行つて、ジナイーダの寢室の小窓を見上げた。すこし返り返っている何枚かの窓ガラスは、夜空から落ちるかすかな光を受けて、ぼうつと青みを帯びていた。と不意に、その色が変わり始めた。……内側から、——そう、わたしは見たのだ、この眼ではつきり見たのだ——白っぽい巻きカーテンが、そつと用心ぶかく下ろされて、窓がまちのところまで下りきつてしまうと、そのままじつと動かなくなつた。

「これはいったい何事だろう？」と、いつのまにか自分の部屋に舞戻っていたわたしは、ほとんど無意識に、そう声に出して言った。——「夢なのか、偶然なのか、それとも……」

そこで突然あたまに浮んだ或る憶測は、あまりにも生々しく、あまりにも異様なものだったので、わたしはどだい受付ける勇氣もなかつた。

「なんだって君は、脳みそを半分抜き取られた兎み^{うさぎ}たいな顔をしているのですね？」と、
出^で会^{かい}い^いが^がし^しら^らに^にル^るー^ーシ^しン^ンが^が言^いっ^たた。

朝飯のとき、わたしは父の様子や母の顔色を、こっそり窺^{うかが}った。父は、いつものとおり落着きはらっていたが、母は例によつて、内心いらいらしていた。わたしは、父が時々出す癖^{くせ}で、打解^{ひげろ}けてわたしに話しかけはしまいかと心待ちにしていた。……けれど父は、つね日頃の例の冷たいお愛想をすら、言つてはくれなかった。

『すっかりジナイーダに話してしまおうか?』と、わたしは考えた。……『こうなつたからには、どっちみち同じじゃないか——どうせ二人の間は、きれいにお仕舞いなんだもの』わたしは彼女かのじよのところへ出かけて行つたが、肝心かんじんの話を切り出すどころか、雑談さえ思うようにできない始末だつた。公爵夫人こうしやくふじんの生みの息子むすこが、ペテルブルグから帰省して来たのである。幼年学校の生徒で、十二ぐらいの子だつた。ジナイーダはこの弟を、

早速わたしの手にあずけた。

「さあ、よくつて」と、彼女は言った。――「わたしの可愛いヴォロージャ（彼女がわたしを愛称で呼んだのは、これが初めてだった）、あなたのいい仲間ができたわ。この子もやつぱり、ヴォロージャっていうのよ。どうぞ、可愛がつてやってちょうだい。まだ野育ちだけれど、気だてはいいのよ。ネスクーチヌイ公園でも見せてやって、一緒に散歩して、目をかけてやって下さいね。ね、いいでしょう、そうして下さるわね？　あなたも、ほんとにいい人なんですもの！」

と言つて、彼女が両手を優しくわたしの肩にかけたので、わたしはすっかりまごついてしまった。この少年が来たおかげで、わたしまでが子供に成り下がったわけである。わたしは黙つて、幼年学校の生徒を眺めた。向うもやはり無言のままわたしを見つめた。ジナイダは、ホホホと笑い出して、わたしたち二人を、どすんとぶつけ合わせた。

「さ、抱き合うのよ、いい子だから！」

我々は抱き合つた。

「どうです、庭を案内しましょうか？」と、わたしは幼年学校の生徒に訊いた。
「は、どうぞ」と彼は、いかにも幼年学校の生徒らしい、しやがれ声で答えた。

ジナイーダはまた笑い出した。……そのひまにわたしは、彼女の顔にこれほど艶麗な紅^{あか}らみのさしたことは、ついぞなかったことに気がついた。

わたしは、幼年学校の生徒と一緒に出かけた。うちの庭には、古いブランコがあった。

わたしは彼を細い板ぎれに坐^{すわ}らせて、揺^ゆすぶってやり始めた。彼は、幅^{はば}の広い金モールのついた、新調らしい厚地のラシャの制服を着て、身じろぎもせず坐ったまま、しっかりと綱^{つな}につかまっていた。

「襟^{えり}のボタンでもはずしたらどうです？」と、わたしは言ってやった。

「いいであります、慣れていきますから」と彼は言って、咳^{せき}払いをした。

彼は姉さんに似ていた。とりわけ眼^めがそっくりだった。わたしは、この少年の面倒^{めんどう}を見てやるのが楽しくもあつたけれど、同時にまた、相も変らぬうずくような侘^{わび}しさが、そつとわたしの胸を嘔^かむのであつた。『ああ、それでも、僕^{ぼく}はすっかり赤^{あか}ん坊^{ぼう}だ』と、わたしは思った。——『ところが昨日は……』

わたしは、ゆうベナイフを落した場所を思い出したので、そこへ行つて拾い上げた。幼年学校生は、それをねだり取つて、ウドの太^{くき}い茎^{くき}を折ると、それで笛^{ふえ}を削^{けず}りあげ、ぴゅうぴゅう吹^ふき出した。オセロもやはり、ちよつと吹いてみた。

だがその代り、その夕方になると、この同じオセロが、ジナイーダの胸に抱かれて、どんなに泣いたことだろう！ それは彼女が、庭の隅でオセロを見つけ出して、なぜそんなに悲しそうにしているのかと、尋ねた時のことである。するとわたしの涙が、おそろしい勢いでほとばしり出たので、彼女はびっくりしてしまった。

「どうしたの？ いったいどうしたの、ヴォロージャ？」と、ジナイーダは繰返したが、わたしが返事もしないし泣きやみもしないのを見て、わたしのびしょ濡れの頬にキスしようとした。が、わたしは顔をそむけて、むせび泣きのひまから、こうさきやいた。――

「僕は、すっかり知っています。なぜあなたは、僕をおもちやにしたんです？……なんのために、僕の愛が入り用だったんです？」

「申し訳ないわ、ヴォロージャ……」と、ジナイーダは言った。――「ああ、ほんとに申し訳ないわ……」と続けて、両手をぎゅっと握り合せた。――「わたしの中には、悪い、後ろ暗い、罪ぶかいものが、なんていっぱいあるんでしょう。……でも今はわたし、あなたをおもちやになんかしていいわ、あなたを愛しているの、――それが、なぜ、どういうふうにかつていうことは、あなたには夢にも想像がつかないわ。……それはそうと、何をいったいあなたは知ってらっしゃるの？」

何をわたしに彼女に言えたらう？　彼女はわたしの前に立って、じつとわたしを見つめていた。そしてわたしは、彼女に見つめられるが早い、たちまち頭から足の先まで、すっかり彼女の俘とりこになつてしまふのだ。……それから十五分すると、わたしはもう幼年学校生やジナイダーと、鬼おにごっこをしていた。わたしは泣かずに、笑つていたけれど、泣きはらした目蓋まぶたは、笑うたんびに涙をこぼすのだった。わたしの首しゅつ玉には、ネクタイの代りに、ジナイダーのリボンが結んであつた。そしてわたしは、首尾しゅびよく彼女の胴をつかまえるたびに、歡喜さけの叫びをあげるのだった。彼女はわたしを、思うままにあやつつていたのだ。

十九

例の失敗におわたつた夜中の遠征えんせいから、一週間の間にわたしの経験したことを、詳しく話してみると言われたら、わたしは頗すこぶる閉口するに違いない。それは、まるで熱病にでもかかったような異様な時期で、えたいの知れぬ混沌こんとんを成しており、この上もなく矛盾むじゆんした感情や、想念や、疑惑ぎわくや、希望や、喜びや、悩みなやが、つむじ風のように渦うずまいていた。

わたしは、自分の心の中を覗いて見るのが怖かった。（ただし、十六歳の少年にも、自分の心の中が覗きこめるものとすればだが）何事にせよ、はつきり突き止めるのが怖かった。わたしはただ、手つとり早く一日を晩まで暮そうと、あせっていた。その代り、夜はぐっすり眠った。……子供っぽい無分別も、この際だいぶ役に立った。わたしは、自分が人から愛されているかどうか、知ろうともしなかったし、人から愛されていないと、はつきり自認するのも厭だった。わたしは父を避けていたが、ジナイーダを避けることは、わたしにはできなかった。……彼女の前へ出ると、まるで火に焼かれるような思いがするのだったが……わたしを燃やし溶かしてゆくその火が、いったいどういう火かということを、別に突き止めたいたいと思わなかったのは、ただそうして溶けて燃えてゆくのが、わたしにはなんとも言えずいい気持だったからである。わたしは刻々の印象に、身を任せっぱなしにした。そして自分に対して狭く立ち回って、思い出から顔をそむけたり、前途に予感されることに目をつぶったりした。……こうした責苦は、ほうっておいてもおそらく長くは続かなかつたろうが……そこへ降ってわいた出来事が、まるで落雷のように一挙にすべに落着をつけ、わたしの道を切り換えてくれたのである。

ある日のこと、かなり長い散歩から、昼飯に帰ってみると、驚いたことには、わたしは

一人きりで食事をしなければならぬことがわかった。父は外出しているし、母は気分が悪
いから何も食べたくないと言って、寢室にとじこもっていたのだ。従僕たちの顔色
から、わたしは何かしら変ったことが起きたなと察した。……従僕たちに聞いただしてみ
る勇氣は出なかつたが、幸いわたしには、食堂係の若者でフィリップという仲好しがいた。
これは熱烈な詩の愛好者で、またギターの名人だ。——わたしは、この男に訊いてみる
ことにした。さて彼の話によると、父と母の間には、すぎまじい一場が演ぜられたのだつ
た。（それは一言残さず女中部屋へ筒抜けに聞えた。フランス語をだいぶ使っていたが、
小間使のマーシャというのが、パリから来た裁縫師のところに五年もいたので、全部わ
かつたのである）母は父の不実を責め、隣の令嬢との交際をなじった。父は最初、な
にかと弁解していたが、やがてカツとなつて、しつぺ返しに、『どうやら奥様のお年の
ことで』むごい言葉を投げつけたので、母は泣き出してしまった。母はまた、公爵夫
人にやったとかいう手形のことを持ち出して、さんざん老夫人をこきおろし、ついでに
令嬢の悪口まで並べたので、父はそこで何やら脅かし文句を叩きつけたそうだ。
「こんな騒動になりましたのも」と、フィリップは言葉を続けた——「もとはと言えば、
無名の手紙からでございます。誰が書いたものやら、それはわかりませんが、それさえな

ければ、こんな事柄ことがらが表沙汰おもてぎたになるわけは、少しもありませんですよ」

「じゃ、やっぱり、何か事柄があつたんだね」とわたしは、やつとのことで言つたが、その間まにわたしの手足は冷たくなり、胸のずっと奥の方で何かわななき出したものがあつた。フリーツプは意味ありげに目配せして、「ありましたです。こういう事は、隠かくしおおせるものじゃございません。旦那様だんなさまも今度という今度は、ずいぶん用心ぶかくやんなさいましたけれど、——やはりまあ早い話が、馬車を雇やとうとか何とか……とにかく人手なしでは済すまないわけですね」

わたしは、フリーツプを下がらせると、ベッドの上にころがった。わたしは、咽むせび泣なきに泣きもしなかつたし、絶望の俘とりこにもならなかつた。また、そんな事がいつたいいつ、どんな風に起つたのかと自問してみるでもなかつた。どうして自分があらかじめ、もつとずつと前に察しがつかなかつたものかと、それを不審ふしんに思うでもなかつた。父を怨うらめしいとさえ思わなかつた。……わたしの知つた事實は、とうていわたしの力の及およばないことであつた。この思いがけない発見は、わたしを押しつぶしてしまつたのである。……一切いっさいは終りを告げた。わたしの心の花々は、一時いちときに残らずもぎ取られて、わたしのまわりに散り敷ふいていた。——投げ散らされ、踏ふみにじられて。

二十

あくる日になると母は、町へ引揚げると言い出した。その朝、父は母の寢室へ入って、長いこと二人きりでいた。父が何を言ったか、誰も聞いた者はないけれど、とにかく母はもう泣かなくなった。母は氣持が落着いて、食事を命じたりしたが、とはいえやはり姿を見せず、決心を変えもしなかった。忘れもしない——わたしはその日は一日じゆう散歩ばかりしていた。もつとも庭へは足を入れず、傍屋を一度だつて振向きもしなかった。ところがその晩になって、わたしは驚くべき出来事をこの眼で見ることになった。父がマレーフスキイ伯爵の腕をとつて、広間を横ぎつて玄關の方へ連れ出し、従僕の前で、冷やかにこう言い渡したのである。――

「二、三日まえ、ある家であなは、ドアをさして見せられたことがありましたな、伯爵。ところで今わたしは、あなたと別に話し合いをしようとは思いませんが、恐縮ながらこれだけは申上げておきます——もしあなたが、この上また宅へお見え下さるようなことがあったら、わたしはあなたを窓からほうり出しますよ。わたしには、あなたの筆跡が

氣にくわんのです」

伯爵は頭を下げて、齒をくいしばると、小さくなつて姿を消した。

モスクワへ引揚げる準備が始まつた。アルバート街にわたしたちの家があつたのである。おそらく父自身にしても、今ではもう別荘に残つていたくはなかつたろう。ただし、父は、この際になつてまた一悶着ひともんちゃくもちあげないように、首尾よく母を説きつけたらしかつた。万事は穩やかに、ゆつくりと運んだ。母は公爵夫人にわざわざ人をやつて、健康がすぐれぬため出発まえにお目にかかれず、まことに残念に思いますと挨拶あいさつさせた。わたしは狂人きやうじんのように、ふらふら表を歩き回つて、一刻も早くこんな騒ぎさわぎがおしまいになつてくれればいいと、そればかり待ち望んでいた。ただ一つだけ、わたしの念頭にこびりついて離れぬ想念があつた。それは彼女かのじよが、あの若い娘が——しかも、とにもかくにも公爵令嬢れいじようともあろう人が、現にわたしの父が独り身ひとみでないことは承知でいながら、また、よしんばあのペロヴゾーロフにしろ誰にしろ、結婚の相手にこと欠かない身でありながら、どうしてあんな思い切つたまねをしたのだろう——ということであつた。いったい何をあてにしていたのだろう？　みすみす自分の前途ぜんとを台なしにするのが、どうして怖ろしくなかつたのだろう？　そうだ、とわたしは思った、——これが恋なのだ、これが情

熱というものののだ、これが身も心も捧げ尽すということなのだ。……そこでふと思い出されたのは、いつかルーシンの言ったことである——『自分を犠牲にすることを、快く感じる人もあるものだ』

ひよいとわたしは、傍屋はなれの窓の一つに、青白いものがぼつんと浮うかんでいるのを目にした。

……

『あれはジナイーダの顔じゃないかしら』と、わたしはふつと思ったが……果してそれは彼女の顔だった。わたしは、もう我慢がまんがならなかった。わたしは彼女に最後のいとまも言わずに、このまま別れてしまふに忍しのびなかった。わたしは折りをうかがって、傍屋へ出かけて行つた。

客間にはいると、公爵夫人が例によつて齒ぎれの悪い、だらしない挨拶でわたしを迎えた。

「どうしたことなの、坊ちゃん、お宅がこんなに早く引揚げなさるなんて？」と夫人は、両方の鼻の穴へ嗅かぎ煙草たばこを詰め込みながら言つた。わたしはその顔を見て、ほっと胸が軽くなつた。あのフィリップの言つた手形という言葉が、ひどく氣になつていたのである。ところが彼女は、そんなことは鵜うの毛けほども考えてはいない……少なくともわたしには、

その時そんなふうに見えたのだ。ジナイーダが、隣の部屋となりから姿を現わした。黒い服を着て、髪かみを梳すきだして、青い顔をしている。彼女は無言のまま、わたしの手をとると、自分の部屋へ連れて行つた。

「あなたの声でしたので」と、彼女は口をきつた。——「すぐ出て行つたのよ。あなたはこんなに簡単に、わたしたちを捨てて行けるのね、意地悪な子！」

「僕は、お別れに来たんです、お嬢じょうさん」と、わたしは答えた。——「たぶん、もうお目にかかる時はないでしょう。お聞きおよびのことでしょうが、わたしたちは引揚げます」

ジナイーダは、じつとわたしを見つめた。

「ええ、聞いたわ。来て下すつてありがとう。もうお目にかかれないんじゃないかと思つていたのよ。わたしのこと、悪く思わないでね。時々あなたを、いじめたけれど、でもわたし、あなたの思つてらつしやるほどの女でもないのよ」

彼女はくると向うをむいて、窓にもたれた。

「ほんとに、わたし、そんな女じゃないの。わたし知つててよ、あなたがわたしのことを、悪く思つてらつしやることぐらい」

「僕が？」

「そう、あなたが……あなたがよ」

「僕が？」と、わたしは悲しげに繰返した。そしてわたしの胸は、うち克つことのできない名状すべからざる陶酔にいざなわれて、あやしく震え始めた。「この僕が？ いいえ信じて下さい、ジナイーダ・アレクサンドロヴナ、あなたがたとえ、どんなことをなさろうと、たとえどんなに僕がいじめられたろうと、僕は一生涯あなたを愛します、崇拜します」

彼女はすばやくわたしの方へ向き直って、両手を大きくひろげると、わたしの頭を抱きしめて、熱いキスをわたしに与えた。その長い長い別れのキスが、誰を心あてにしたものか、神ならぬ身の知るよしもなかったけれど、わたしはむさぼるように、その甘さを味わった。わたしはそれが、もはや二度と返らぬことを知っていたのだ。「さよなら、さよなら」と、わたしは繰返した。……

彼女は、わたしを振りもぎって出て行った。わたしも外へ出た。外へ出ながら、自分の胸中を去来した感情を、わたしは筆に伝えるだけの力がない。わたしは、またいつかそれが繰返されることを望みはしなかった。とはいえ、もしついぞ一度もそのキスの味わいを

知らなかったら、わたしは自分をよくよくの不仕合せ者と思ったことだろう。

わたしたち一家は、町へ引揚げた。わたしは、なかなか過去と縁を切ることができなかつたし、そう手つとり早く勉強にかかることもできなかつた。心の痛手が癒えるまでには相当の時間が要つたのである。とはいえ、父その人に対しては、わたしは少しも悪い感情を抱いていなかった。むしろ逆に、父はわたしの目に、一層大きな人物として映ずるふしもあったのである。……この矛盾は、心理学者どもが、なんとも勝手に解釈するがよいのだ。

ある日、わたしは並木道を歩いていると、ひょっくりルーシンにぶつかったので、とびあがるほど嬉しかった。わたしは彼のまっすぐな、飾り気のない性質が好きだったし、かてて加えて、この久しぶりの面会が、わたしの胸に呼びさましてくれた追憶のおかげで、いやが上にも彼はなつかしい人物だったわけである。わたしは、その前へ飛んで行った。

「よう、これは！」と、彼は言つて、眉の根を寄せた。——「なるほど、君だったんですね！ まあちよいと、顔を見せて下さいよ。相変らずの黄いろい顔だが、さすがに眼の中に、一頃の無分別さだけはなくなりましたね。やつと愛玩用の小犬じゃなくて、一人

前の男に見えますよ。いや結構、そこでどうです、勉強していますか？」

わたしは、溜息ためいきをついた。嘘うそをつくのはいやだったし、さりとて本音をかくのは恥はずかしかった。

「なあに、いいですよ」と、ルーシンは言葉が続けた。――「びくびくすることはしないで。肝心かんじんなのは、ちゃんとした生活をして何事によらず夢中むちゅうにならないことですよ。

夢中になったところで、なんの役に立ちます？ 波が打ちあげてくれるところは、ろくでもない場所に決ってますよ。人間というものは、たとえ岩の上に立っているにしても、やはり立つのは自分の両足ですからなあ。僕はこのとおり、どうも咳せきが出ていかんです。……ところでベロヴゾーロフは――あなた、何か噂うわさを聞きましたか？」

「なんですか？ 聞きませんが」

「ゆくえ不明なんです。カフカースへ行ったという話だが、君みたいな若い人には、全くいい教訓ですな。要するに、潮時を見て引揚げること、網あみを破ぬって抜け出すことが、できないからですよ。君はどうやら、無事に逃にげ出したらしいが、また網に引つかからないように用心しなさいよ。じゃ、さようなら」

『引つかかるもんか』と、わたしは思った。……『もう二度と再び、あの人には会わない』

んだ』

ところがわたしは、もう一度ジナイーダを見かける運命にあったのだ。

二十一

父は毎日、馬に乗って外へ出かけた。彼は赤栗毛あかくりげの、すばらしいイギリス馬を持っていた。すらりと細長い首をして、よく伸びた脚あしをして、疲れを知らぬ荒馬あらうまだった。その名を、「いなずま《エレクトリック》」といって、父のほかには誰一人だれひとり、乗りこなす人はなかった。

ある日のこと、父は久方ぶりの上機嫌じょうきげんで、わたしの部屋へ入ってきた。彼はこれから馬で出かけるところで、ちゃんと拍車はくしゃをつけていた。わたしは、一いっしょ緒に連れて行つて下さいとせがんだ。

「まあそれより、馬とびでもして遊んだらいいだろう」と、父は答えた。――「おまえの痩せ馬やうまじゃ、とてもついて来こられまいからな」

「ついて行けますよ。僕も拍車をつけるから」

「ふむ、まあいいだろう」

わたしたちは出発した。わたしの馬は、むく毛の若い黒馬で、脚も丈夫だし、悍も相
当つよかつた。もつとも、エレクトリークが早足トロットいっぱい走り出すと、わたしの馬は
全速力を出さなければならなかったが、とにかくわたしは食い下がって行つた。わたしは、
父ほどの乗り手を見たことがない。その馬上の姿は実に美しく、無造作に楽々と乗りこな
しているところは、鞍くらの下くみの馬までが感じ入って、乗り手を誇りほことして見えるように見えた。
わたしたちは、並木なみき通りを片っぱしから乗り尽つくして、処女が原おとめはらもしばらく乗り回し、垣か
根きねも幾いくつか跳とび越こして（初めは跳とび越こすのが怖こわかつたけれど、父が臆病者おくびょうものを軽蔑けいべつ
するので、やがてわたしも怖がらなくなつた）、モスクワ川を二度も渡わたつた。それでわたし
は、もうそろそろ帰るのだらうと思つた。ましてや当の父が、わたしの馬の疲れたことに
目をとめたからには、なおさらのことだつた。ところが父は、いきなりわたしのそばから
馬首を転じると、クリミア浅瀬あさせからわきへそれて、河岸かしづたいにまっしぐらに飛ばし始め
た。わたしは懸命けんめいにあとを追つた。古丸太が山のように積み上げてある所までくると、
父はひらりとエレクトリークからとび下りて、わたしにも下りるように命じた。そして、
自分の馬の手綱たづなをわたしにあずけると、しばらくその丸太積みのそばで待っているように

言いつけて、自分は細い横町へ折れるなり、姿を消してしまった。

わたしは、二頭の馬を引っぱって、エレクトロリックを叱りつけながら、河岸を行ったり来たりし始めた。エレクトロリックは歩きながら、ひっきりなしに頭を振りもぎったり、胴ぶるいをしたり、鼻を鳴らしたり、いなないたりした。わたしが立ち止まると、左右の蹄でかわるがわる土を掘ったり、けたたましい声を立てて、わたしの痩せ馬の首ったまに噛みついたりした。要するにまあ、甘やかされ放題の純血種らしく振舞ったわけである。父はなかなか戻って来なかった。川からは、いやに湿っぽい風が吹いてきた。ぬか雨が音もなく降り出して、さつきからわたしがさんざんそばをぶらついて、今ではもう飽き飽きしてしまった馬鹿げた灰色の丸太の山に、べた一面ちっぽけな黒ずんだ点々をつけた。わたしは心細くなってきたが、父はやっぱり戻って来ない。フィンランド人のお巡りさんが一人、上から下までやはり灰色の服を着け、壺みたいな格好の、おそろしく大きな古くさい筒形帽子をかぶり、ほこ形の警棒を小脇にして、（それにしても、なんだって巡查がモスクワ川の岸になんぞいるのだろう！）わたしに近づいてきた。そして、婆さんじみた皺だらけの顔をわたしに向けると、こう言った。――

「あんた馬なんか連れてこんな所で、何してるんですね、ええ、坊ちゃん？　およこしな

さい、持つていてあげるから」

わたしは返事をしなかった。彼は煙草たばこをねだった。この男からのがれたさに（それにまた、待ち遠しさに耐えかねもして）、わたしは父の立ち去った方角へ五、六歩あるいた。それから、その横町をはずれまで行つて、角を曲ると、はたと立ち止った。その往来を、ものの四十歩ほど行つた先の所に、木造の小さな家のあけはなされた窓に向つて、背中をこちらへ向けながら、父が立つていたのである。父は胸を窓がまちにもたせていた。家の中には、カーテンに半ば隠れながら、黒っぽい服を着た女が坐すわつて、父と話をしている。この女が、ジナイーダだった。

わたしは立ちすくんでしまった。全くのところ、そんなことは思いもかけなかったのである。わたしのしかけた最初の動作は、逃げ出すことだった。『父は振返ふりかえるかもしれない』と、わたしは考えた。——『そしたら、もう万事休すだ』……けれど、不思議な感情が——好奇心こうきしんよりも強く、嫉妬しつとなどよりもまだ強く、恐怖きょうふよりも強い感情が、わたしを引止めた。わたしは、じつと目をこらし始めた。一生けんめい聴きき耳みみを立てた。父は、しきりに何やら言い張っているらしかった。ジナイーダは、いっかな承知しない。その彼かのじ女の顔を、今なおわたしは目の前に見る思いがする。——悲しげな、真剣しんけんな、美しい

顔で、そこには心からの献身と、嘆きと、愛と、一種異様な絶望との、なんとも言いようのない影がやどつていた。そうとでも言うほかには、わたしは言葉を考えつかない。彼女は、「ええ」とか「いいえ」とかいったたぐいの、短い言葉で受け答えして、眼を上げずに、ただほほ笑んでいた。――従順な、しかも頑なな微笑である。この微笑を見ただけでもわたしは、ああ、もとのジナイーダだなど思った。

父はひよいと肩をすくめて、帽子をかぶり直した。それはいつも決つて父がいらいらし出したしるしであつた。……それから「あなたは思い切らなくちやだめです、そんな無理な……」という父の声がした。ジナイーダは、きつと身を起して、片手をさし伸べた。……その途端に、わたしの見ている前で、あり得べからざることが起つた。父がいきなり、今まで長上着の裾の埃をはらつていた鞭を、さつと振上げたかと思うと――肘までむきだしになつていたあの白い腕を、ぴしりと打ちする音がしたのである。わたしは思わず叫び声を立てようとして、あやうく自分を押えた。ジナイーダは、ぴくりと体を震わしたが、無言のままちらと父を見ると、その腕をゆっくり唇へ当てがつて、一筋真つ赤になつた鞭のあとに接吻した。父は、鞭をわきへほうりだして、あわてて玄関の段々を駆けあがると、家の中へとび込んだ。……ジナイーダは後ろを振返ると、さつと両手をひろげ、顔

をのけぞらせて、やはり窓から消えてしまった。

おどろ

驚きのあまり気が遠くなつて、おそろしい疑惑に胸を締めつけられながら、わたしはもと来た方へ駆け出して、横町を走り抜ける拍子に、すんでのことでエレクトロークの手綱を離すところだったが、とにかく河岸へとつて返した。あたまがこんぐらかつて、全然まとまりがつかなかった。わたしは、冷静で自制力の強い父が、時々発作的な狂暴さを見せることは知っていたが、それにしても今しがた見た光景は、なんとしても合点がゆかなかった。——とはいえ、わたしは同時にまた、このさき自分がどれほど生きるにせよ、ジナイーダのあの身の動き、あの眼差し、あの微笑を忘れることは、終生とでもできない、——今まで見たこともないあの姿、思いがけなく今日わたしの眼に映ったあの姿は永遠にわたしの記憶に焼きつけられたのだ——とも感じた。わたしは、ぼんやり川に見入りながら、涙のながれているのに気づかずにはいた。『あのひとが、ぶたれるのだ』と、わたしは思った。『……ぶたれるのだ……びしり……びしり……』

「おい、どうしたね、——馬をおよこし！」と、後ろで父の声がした。

わたしは、うわの空で手綱をわたした。父はひらりと、エレクトロークにまたがったが、凍えきった馬はいきなり後脚で突つ立つて、一丈あまりも前へはねた。……だが父は、じ

きに馬をしずまらせた。ぐいと拍車を両の脇腹へ入れて、握りこぶしで首に一撃を加えたのである。……

「ちえつ、鞭がない」と、父はつぶやいた。

わたしは、ついさっきの風を切る唸りと、その鞭がぴしりと鳴った音を思い出して、おもわず震え上がった。

「どこへやっतんですか？」と、しばらくしてからわたしは訊いた。

父は答えずに、ずんずん前へ飛ばした。わたしは追いついた。どうしても父の顔が見たかったのだ。

「わたしのいない間、退屈だったろうな、お前？」と父は、へんにもぐもぐした声で言った。

「ええ、少しね。でも、一体どこへ鞭を落したんです？」と、わたしはまた訊いた。

「落したのじゃない」と、父は言い放った。――「捨てたのさ」

彼は急に考え込んで、うなだれた。……わたしはその時初めて、そして多分これを最後に、父のきびしい顔だちがどれほどの優しさと同情の思いを、表わすことができるかを見たのである。

父はまた馬を飛ばし出した。もうわたしは追いつけなかった。わたしは十五分ほど遅れて、家に帰りついた。

『これが恋なのだ』とわたしは、その夜がふけてから、デスクの前に坐つて、またもやひとりごちた。そのデスクの上には、すでにノートや参考書がそろそろ並び出していた。――

――『これが情熱というものなのだ！……ちよつと考えると、たとえ誰の手であろうと……よしんばどんな可愛らしい手であろうと、それでびしりとやられたら、とても我慢はなまい、憤慨せずにはいられまい！』ところが、一旦恋する身になると、どうやら平気でいられるものらしい。……それを俺は……それを俺は……今の今まで思い違えて……』

この一月の間に、わたしは大層年をとってしまった。そして自分の恋も、それに伴ういろんな興奮や悩みも、いま新たに出現した未知の何ものかの前へ出すと、我ながらひどく小っぱけな、子供じみた、みすばらしいものに見えた。とはいえ、その未知の何ものかの正体は、わたしにはほとんど推察することができなかった。それはただ、自分が一生けんめい薄闇の中で見きわめようと空しい努力をしている、見知らぬ、美しい、しかも物凄顔のように、わたしをおびえさせるだけであつた。

ちようどその夜、わたしは奇妙な恐ろしい夢をみた。わたしは、天井の低い暗い

部屋へ入って行くところだった。……と父が、鞭を手に仁王立ちになって、足を踏み鳴らしていた。隅の方には、ジナイーダが身を縮めていたが、その腕にはなしに、その額に、^{あか}紅い一筋がついている。……そこへ、二人の後ろから、体じゅう血だらけのペロヴゾーロフが、むくむく起き上がって、青ざめた唇を開くと、^{ふんぬ}忿怒にわななきながら、父を脅かすのだった。

ふた月すると、わたしは大学に入った。それから半年後に、父は（^{のういっけつ}脳溢血のため）ペテルブルグで亡くなった。母やわたしを連れて、そこへ引移ったばかりのところだった。死ぬ二、三日前に、父はモスクワから一通の手紙を受取ったが、それを見て父は非常に興奮した。……彼は母のところへ行つて、何やら頼み込んだ。そして聞くところによると、泣き出しさえたそうである。あの、わたしの父がである！ 発作の起る日の朝のこと、父はわたしに宛てて、フランス語の手紙を書き始めていた。『わが息子よ』と、父は書いていた。——『女の愛を恐れよ。かの幸を、かの毒を恐れよ』……

母は、父が亡くなったのち、かなりまとまった金額をモスクワへ送った。

四年ほど過ぎた。わたしは大学を出たばかりで、何を始めたものか、どんな扉^{とびら}をたたいたらいのか、まだよくわからず、さし当^{さしか}つてぶらぶら遊^{あそ}んでいた。ある晩のこと、わたしは劇場で、マイダーノフに出会^{であ}った。彼は^{かれ}めでたく妻帯^{さいたい}して、役所に勤^{きん}めていたが、わたしの目には少しの變化^{へんげ}も見^み当^{あた}らなかつた。相変^{あい}らず、要^いりもせぬのに感^{かん}激^{げき}したり、例によつて、いきなり悄^{しよげ}気^きかえつたりした。

「君は知^しつてるでしょうね」と、話^わのついでに彼は言^いつた。――「ドーリスカヤ夫人^{ふじん}が、ここに來^きていることは」

「ドーリスカヤ夫人^{ふじん}というと？」

「おや、君は忘^{わす}れたんですか？ もとのザセーキナ公^{こう}爵^{しゃく}令^{れい}嬢^{じょう}ですよ。みんなでんでん^{こい}に恋^{こい}していた……いや、君だつてそうでしたね。覺^{おぼ}えてるでしょう、あのネスクーチヌイ公^{こう}園^{えん}のそばの別^{べつ}荘^{そう}で、ね？」

「あのひとが、ドーリスキイとやらの奥^{おく}さんになつたんですか？」

「そう」

「で、あの人がここに來^きてるんですか、この劇場^{げきじやう}に？」

「いや、ペテルブルグに来てるんですよ。二、三日前にやって来たんです。外国へ発つたりらしい」

「夫というのは、どんな人なんです？」と、わたしは尋ねた。

「なかなかいい男ですよ、財産もあるし。僕とはモスクワの役所の同僚でしてね。あなたにもお察しがつくはずだが——例の一件以来……もちろんあれは、よく御存じでしょうね……（マイダーノフは、意味ありげにやりとして）あの人は配偶を求めるのが、なかなか容易じゃなかったんです。いろいろ、あとを引く問題もありましたからね。……だが、あの人の才智をもってすれば、どんなことでも可能ですよ。まあひとつ行つて御覧なさい。君の顔を見たら、とても喜ぶでしょうよ。あの人は、前よりもっと奇麗になりましたよ」

マイダーノフは、ジナイーダの宿所を教えてくれた。彼女はデムート館というホテルに泊つていたのである。昔の思い出が、わたしの胸の中でうごめき始めた。……わたしは、あくる日すぐにも、かつての『想いびと《パツシア》』を訪ねようと心に誓つた。ところが、何かと用事ができて、一週間たち、二週間たってしまった。ようやくわたしが、デムート館へ出かけて、ドーリスカヤ夫人に面会を申し入れると、——彼女は四日前に死んだ、

と聞かされた。産のための、ほとんどあつという間もない死に方だった。

わたしは、何かしら心臓へぐつと、突き上げるものを感じた。わたしは彼女に会えたはずなのに、つい会わずにしまった、しかももう永久に会えないのだ……という想念——このにがにがしい想念が、ひしとわたしの心に食い入って、うちしりぞけることのできない呵責かしやくの鞭むちを、力いっぱいふるうのだった。『死んだ!』とわたしは、入口番の顔をぼんやり見つめながら、鸚鵡返おうむがえしに言った。そして、そつと往来へ出ると、どこへとて当てもなしに歩き出した。過去の一切いっさいが、いちどきに浮うかび出て、わたしの眼めの前に立ち上がった。そうか、これがその解決だったのか! あの若々しい、燃えるような、きららかな生命いのちが、わくわくと胸をおどらしながら、いつさんに突き進んで行った先は、つまりこれだったのか! わたしはそれを思いながら、あのなつかしい顔だちや、あのつぶらな眼や、あのふさふさと巻いた髪かみが、あの狭せまくらしい箱はこの中に納められて、じめじめした地下やみの闇やみのなかに眠ねむっているところを心に描えがいた。——それは、まだこうして生きているわたしから、そう遠くない場所なのだ。そしてひよつとすると、わたしの父のいる場所からは、ほんの五、六歩しかないかもしれないのだ。……わたしは、そんなことを考えながら、想像のつばさを張りきらせているうちに、ふと、

情け知らずな人の口から、わたしは聞いた、死の知らせを。

そしてわたしも、情け知らずな顔をして、耳を澄すました。

という詩の文句が、わたしの胸に響ひびいた。

ああ、青春よ！ 青春よ！ お前はどんなことにも、かかずらわれない。お前はまるで、この宇宙のあらゆる財宝を、ひとり占じめにしているかのようだ。憂ゆう愁しゅうでさえ、お前にとっては慰なぐさめだ。悲哀ひあいでさえ、お前には似につかわしい。お前は思おもい上がって傲慢ごうまんで、

「われは、ひとり生きる——まあ見ているがいい！」などと言うけれど、その言葉のはしから、お前の日々はかけり去あつて、跡あとかたもなく帳とじりもなく、消えていつてしまうのだ。さながら、日なたの蟬せみのように、雪のように。……ひよつとすると、お前の魅力みりよくの秘密はつまるところ、一切を成なしうることにあるのではなくて、一切を成なしうると考えることができるところに、あるのかもしれない。ありあまる力を、ほかにどうにも使いようがないので、ただ風のまにまに吹ふき散ちらしてしまうところに、あるのかもしれない。我々の一人々々が、大まじめで自分を放蕩者ほうとうものと思おもい込こんで、「ああ、もし無駄むだに時を浪費ろうひさえし

なかつたら、えらいことができたのになあ！」と、立派な口をきく資格があるものと、大
まじめで信じているところに、あるのかもしれない。

さて、わたしもそうだったのだ。……ほんの束の間たち現われたわたしの初恋のまぼ
ろしを、溜息の一吐き、うら悲しい感觸の一息吹きをもつて、見送るか見送らない
かのあの頃は、わたしはなんという希望に満ちていただろう！ 何を待ちもうけていたこ
とだろう！ なんとという豊かな未来を、心に描いていたことだろう！

しかも、わたしの期待したことなかで、いったい何が実現しただろうか？ 今、わた
しの人生に夕べの影がすでに射し始めた時になってみると、あのみるみるうちに過ぎてし
まった朝まだきの春の雷雨の思い出ほどに、すがすがしくも懐かしいものが、ほかに何か残
っているだろうか？

だがわたしは、いささか自分につらく当り過ぎているようだ。その頃——つまりあの無
分別な青春の頃にも、わたしはあながち、わたしに呼びかける悲しげな声や、墓穴の中か
らつたわってくる莊嚴な物音に、耳をふさいでいたわけではない。忘れもしないが、ジ
ナイーダの死を知った日から四、五日して、わたしは自分でどうしてもそうせずにはいら
れなくなつて、わたしたちと一つ屋根の下に住んでいたある貧しい老婆の、臨終に立

ち会つたことがあつた。ぼろに身を包み、こちこちの板の上に横たわり、袋を枕代りにした老婆は、苦しみもがきながら息を引取つた。彼女の一生は、その日その日の乏しい暮しに、あくせく追われ通して過ぎたのだ。喜びというものをついぞ知らず、幸福の甘い味わいも知らない彼女としては、まさに死をこそ、——そのもたらす自由を、そのもたらす憩いをこそ、喜び迎えるべきではなかつたか？　ところが、彼女の老いさらばえた肉体がまだ保っているうちは、その上に置かれた氷のように冷え果てた片手のもとで胸がまだ苦しげに波うっているうちは、まだその身から最後の力が抜けきらないうちは、老婆はひつきりなしに十字を切り続けて、「主よ、わが罪を許させたまえ」とささやき続けるのであつた。——そして、これを名残りの意識のひらめきが、すつと消えると共に、彼女の眼の中でも、末期の恐れやおびえの色が、やつと消えたのである。忘れもしない、そのとき、その貧しい老婆のいまわの床に付き添いながら、わたしは思わずジナイーダの身になって、そら恐ろしくなつてきた。そしてわたしは、ジナイーダのためにも、父のためにも、そしてまた、自分のためにも、しみじみ祈りたくなつたのである。

青空文庫情報

底本：「はつ恋」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年12月25日発行

1987（昭和62）年1月30日73刷改版

1997（平成9）年5月25日92刷

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）と「《》」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

入力：松永佳代

校正：阿部哲也

2011年9月28日作成

2013年1月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はつ恋 ツルゲーネフ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 神西清訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>